

仙台平野の遺跡群 33

令和 4 年度 個人住宅他
国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書

南小泉遺跡第 93・94 次、西台窯跡第 1 次
栗遺跡第 3 次、北目城跡第 11～15 次

2023 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台平野の遺跡群 33

令和 4 年度 個人住宅他
国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書

南小泉遺跡第 93・94 次、西台窯跡第 1 次
栗遺跡第 3 次、北目城跡第 11 ~ 15 次

2023 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日頃からご理解、ご協力を賜り、感謝申し上げます。

仙台市内には旧石器時代から近世にいたるまで数多くの埋蔵文化財が遺っております。これらの一つ一つは、先人たちが残した貴重な文化遺産です。

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災から 12 年が経ち、復興・創生期間 7 年目を迎えておりますが、個人住宅等の建築に伴う発掘届や発掘調査の件数は、平成 23 年度以降、震災前を上回る状況が継続しております。このような中、仙台市教育委員会といたしましては、復旧・復興事業との調整を図りながら、埋蔵文化財の保護と啓発に日々務めているところです。

本報告書には、個人住宅建設に伴って令和 2 年度から令和 3 年度にかけて発掘調査を実施した、南小泉遺跡第 93・94 次調査、西台窯跡第 1 次調査、栗遺跡第 3 次調査、北目城跡第 11 ~ 15 次調査の調査結果を収録しています。文化財は、地域の歴史を将来へ伝えるために守るべき大切な財産です。先人たちの遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たちの使命であると思います。それは地域が育んだ文化を語る上で歴史や文化資源がその根底をなしているからです。本報告書が学術研究のみならず学校教育や生涯学習などに寄与し、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心と理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査や報告書の作成に際して、ご協力いただいた多くの方々に心より感謝申し上げます。

令和 5 年 3 月

仙台市教育委員会
教育長 福田 洋之

例 言

1. 本書は、令和4年度個人住宅他国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書であり、南小泉遺跡第93・94次、西台窓跡第1次、栗遺跡第3次、北目城跡第11～15次の各発掘調査報告書を合本にしたものである。
2. 本書の本文執筆・挿図・表・写真図版の作成等については以下のように分担し、編集は須貝慎吾、早川太陽が行った。

第1章—早川太陽 第2章—柳澤楓、澤目雄大 第3章—及川謙作
第4章—澤目雄大 第5章—須貝慎吾、山口沙織 第6章—妹尾一樹

遺物の基礎整理—荒井格、須貝慎吾、早川太陽、吉田大、向田文化財整理室作業員
遺物図・遺構図デジタルトレースー向田文化財整理室作業員
遺構註記表作成—各担当職員、向田文化財整理室作業員
遺物写真撮影・図版作成ー向田文化財整理室作業員
遺構写真図版作成—各担当職員、向田文化財整理室作業員
3. 本書に係る出土遺物、実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本文中の「～遺跡と周辺の遺跡」図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図を、また、「調査区位置図」などは仙台市発行の2千5百分の1都市基本図を、それぞれ加筆・修正して使用した。
2. 各章の平面図中に示した方位は概ねの方位である。
3. 図中の座標値は世界地図系を使用している。
4. 遺構の略称は以下の通りで、遺構番号は各調査別の通し番号である。

SD：溝・堀跡 SI：竪穴住居跡・竪穴遺構 SK：土坑 P：ピット SX：性格不明遺構
5. 遺物の略称は以下の通りである。

A：繩文土器 B：弥生土器 C：土師器（非クロ調整） D：土師器（クロ調整）・赤焼土器
E：須恵器 F：丸瓦 G：平瓦 H：その他の瓦 Ia：土師質土器 Ib：瓦質土器 Ic：陶器
J：磁器 K：石器・石製品 L：木製品 N：金属製品 O：自然遺物 P：土製品
6. 土色については、「新版標準土色帳」（小山・竹原1999）を使用した。
7. 遺構図に使用したトーンは以下の通りである。また、各図に必要に応じて凡例を付した。



：柱痕跡

8. 遺物実測図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。



：黒色処理

9. 遺物写真の縮尺は遺物図版に掲載した同一個体のそれに準ずる。写真掲載のみの遺物は、3分の1で掲載している。

目 次

第1章 調査計画と実績	1
第1節 調査体制	1
第2節 調査計画	1
第3節 調査実績	1
第2章 南小泉遺跡の調査	3
第1節 遺跡の概要	3
第2節 第93次調査	3
第3節 第94次調査	10
第3章 西台窯跡の調査	15
第1節 遺跡の概要	15
第2節 第1次調査	15
第4章 栗遺跡の調査	23
第1節 遺跡の概要	23
第2節 第3次調査	23
第5章 北目城跡の調査	32
第1節 遺跡の概要	32
第2節 第11次調査	33
第3節 第12次調査	37
第4節 第13次調査	40
第5節 第14次調査	43
第6節 第15次調査	46
第6章 郡山遺跡の調査	51
第7章 総括	52

挿図目次

第1図 令和2～4年度調査地点位置図 (国土地理院地図を一部改変)	2	第11図 第94次調査区平面・断面図	11
第2図 南小泉遺跡と周辺の遺跡	3	第12図 第94次調査出土遺物	12
第3図 第93次調査区位置図	3	第13図 西台窯跡と周辺の遺跡	15
第4図 第93次調査区配置図	3	第14図 第1次調査区位置図	16
第5図 第93次調査区平面・断面図	4	第15図 第1次調査区配置図	16
第6図 SII堅穴遺構平面図	5	第16図 第1次調査区平面・断面図	17
第7図 SII堅穴遺構出土遺物	6	第17図 第1次調査出土遺物(1)	18
第8図 SK2土坑出土遺物	7	第18図 第1次調査出土遺物(2)	19
第9図 第94次調査区位置図	10	第19図 1952年頃の西台窯跡・原遺跡周辺の空撮写真	20
第10図 第94次調査区配置図	10	第20図 栗遺跡と周辺の遺跡	23
		第21図 第3次調査区位置図	24

第22図	第3次調査区配置図	24	第33図	第12次調査出土遺物	39
第23図	第3次調査区平面・断面図	25	第34図	第13次調査区配置図	40
第24図	第3次調査出土遺物（1）	26	第35図	第13次調査区平面・断面図	41
第25図	第3次調査出土遺物（2）	27	第36図	第13次調査出土遺物	41
第26図	第3次調査出土遺物（3）	28	第37図	第14次調査区配置図	43
第27図	北目城跡と周辺の遺跡	32	第38図	第14次調査区平面・断面図	44
第28図	第11次～15次調査区位置図	33	第39図	第15次調査区配置図	46
第29図	第11次調査区配置図	33	第40図	第15次調査区平面・断面図	47
第30図	第11次調査区平面・断面図	35	第41図	北目城跡第7・8・10～15次調査	
第31図	第12次調査区配置図	37		堀跡配置図	49・50
第32図	第12次調査区平面・断面図	38	第42図	郡山遺跡調査区位置図	51

挿表目次

表1	令和3年度 個人住宅の建築に伴う発掘調査一覧	1
表2	令和4年度 個人住宅の建築に伴う発掘調査一覧	2
表3	本書収録調査一覧	2
表4	令和4年度 郡山遺跡発掘調査一覧	51

写真図版目次

写真図版1	南小泉遺跡第93次調査（1）	8
写真図版2	南小泉遺跡第93次調査（2）・出土遺物	9
写真図版3	南小泉遺跡第94次調査（1）	13
写真図版4	南小泉遺跡第94次調査（2）・出土遺物	14
写真図版5	西台窯跡第1次調査	21
写真図版6	西台窯跡第1次調査出土遺物	22
写真図版7	栗遺跡第3次調査	29
写真図版8	栗遺跡第3次調査出土遺物（1）	30
写真図版9	栗遺跡第3次調査出土遺物（2）	31
写真図版10	北目城跡第11次調査	36
写真図版11	北目城跡第12次調査・出土遺物	39
写真図版12	北目城跡第13次調査・出土遺物	42
写真図版13	北目城跡第14次調査・出土遺物	45
写真図版14	北目城跡第15次調査	48

第1章 調査計画と実績

第1節 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育生涯学習部文化財課

令和2年度

【文化財課】課長 長島栄一

【調査調整係】係長 平間亮輔 主査 栗田祥郎 近藤勇亮

主任 及川謙作 小浦真彦 尾形隆寛

主事 澤目雄大 相川ひとみ 柳澤 機 木村 恒

専門員 斎野裕彦 会計年度任用職員 篠原信彦

【整備活用係】係長 工藤慶次郎 主査 元山祐一 総括主任 高橋勝枝

主任 堀越 研 佐藤文征 主事 庄子裕美 五十嵐 愛

令和3年度

【文化財課】課長 都丸晃彦 主査(調整担当) 長島栄一

【調査調整係】係長 平間亮輔

主任 及川謙作 近藤勇亮 菅原翔太 主任 堀江洋介

主事 庄子裕美 澤目雄大 相川ひとみ 柳澤 機 木村 恒 早川太陽

専門員 斎野裕彦 会計年度任用職員 篠原信彦

【整備活用係】係長 工藤慶次郎 主査 元山祐一 小浦真彦

主任 堀越 研 勝又 康 主事 五十嵐 愛 妹尾一樹

専門員 荒井 格

令和4年度

【文化財課】課長 都丸晃彦 主査(調整担当) 長島栄一

【調査調整係】係長 及川謙作 主査 近藤勇亮 主任 堀江洋介

主任 澤目雄大 相川ひとみ 須貝慎吾 早川太陽 吉田 大 山口沙織

専門員 荒井 格 会計年度任用職員 鈴木利枝

【整備活用係】係長 工藤慶次郎 主査 小浦真彦 菅原翔太 主任 堀越 研 勝又 康

主任 庄子裕美 五十嵐 愛 妹尾一樹 会計年度任用職員 主演光朗

第2節 調査計画

主に個人専用住宅の建築に伴う発掘調査費用の補助を目的とし、「個人専用住宅補助事業費」として、総額6,690千円（このうち補助金額3,345千円）の予算で54件の調査を計画した。

第3節 調査実績

令和3年度～令和4年度（令和4年1月～令和4年12月）にかけて実施した調査は表1・2の通りで、合計40件である。このうち本書に収録したのは表に示した令和2年度～令和3年度にかけての9件である。

表1 令和3年度 個人住宅の建築に伴う発掘調査一覧 (令和4年1月～3月)

番号	調査地	遺跡名	所在地	対象面積 (m ²)	調査面積 (m ²)	調査期間	遺構・遺物	届出等	報告書
1	R3-45	北日向68	太白区東照山2丁目	54.0	12.0	1月11～13日	ピット	R3 108～320	—
2	R3-47	桜山遺跡315次	太白区桜山3丁目	50.5	12.0	1月17～21日	ピット	R3 108～406	桜山
3	R3-49	南小字遺跡	若林区東見附1丁目	61.7	12.0	1月24～27日	土坑・小窓・性格不明遺構・ピット・他土・土師器など	R3 108～389	次年度以降
4	R3-50	南小字遺跡	若林区南小字4丁目	58.0	7.7	1月28日	土坑	R3 108～378	—
5	R3-53	今市遺跡	宮城町今岩切字三所北	48.4	6.0	2月3日	遺構・遺物なし	R3 108～424	—
6	R3-54	北日向68	太白区東照山2丁目	54.0	12.0	2月7～9日	他土	R3 108～651	次年度以降
7	R3-55	北日向68	太白区東照山2丁目	47.8	12.0	2月7～9日	他土	R3 108～652	次年度以降
8	R3-56	北日向68	太白区東照山2丁目	52.0	12.0	2月7～9日	他土	R3 108～653	次年度以降
9	R3-61	埋蔵文化財	太白区中田7丁目	58.2	12.0	3月10日	遺構・遺物なし	R3 108～482	—
10	R3-65	桜山遺跡317次	太白区桜山6丁目	65.2	20.0	2月14～17日	材木剣?	R3 108～476	桜山
11	R3-66	桜山遺跡316次	太白区桜山3丁目	58.6	28.8	3月14～18日	鉢足列・建物跡1・土坑1・ピット3・土師器・瓶底器	R3 108～457	桜山

第3節 調査実績

表2 令和4年度 個人住宅の建築に伴う発掘調査一覧 (令和4年4月～12月)

調査番号	道路名	所在地	対象面積 (m ²)	調査面積 (m ²)	調査期間	遺構・遺物	発出等番	報告書
1 R4-1	北目城跡	太白区東郷山2丁目	54.0	12.0	4月13～18日	ピット、土師器	E3 108-514	—
2 R4-2	北目城跡	太白区東郷山2丁目	64.3	16.0	4月13～18日	板跡	E3 108-542	次年度以降
3 R4-3	鶴山道跡第318次	太白区東郷山6丁目	61.3	15.0	4月19～22日	板跡、丹戸跡、土師器、須恵器、瓦	E4 104-26	郡山
4 R4-8	北目城跡	太白区東郷山2丁目	58.1	16.0	5月11～13日	板跡	E4 104-6	次年度以降
5 R4-9	北目城跡	太白区東郷山2丁目	64.3	12.0	5月11～12日	遺構なし	E4 104-7	—
6 R4-10	埋蔵窯跡	太白区東郷山2丁目	54.8	12.0	5月18～20日	ピットなど、土師器	E4 104-21	—
7 R4-15	南小泉遺跡	若林区南小泉2丁目	64.6	12.0	6月9～10日	板跡、遺物なし	E4 104-81	—
8 R4-19	今泉遺跡	若林区今泉2丁目	69.7	12.0	6月23～27日	性格不明遺構、生糞土器、土師器	E4 104-98	次年度以降
9 R4-20	北目城跡	太白区山字字内田地	81.2	12.0	7月4～5日	板跡、遺物なし	E3 108-551	—
10 R4-21	前田宿跡	太白区中田6丁目	62.8	10.5	7月6日	板跡、遺物なし	E4 104-124	—
11 R4-22	北目城跡	太白区東郷山2丁目	52.0	12.0	7月12～21日	板跡、遺物なし	E4 104-104	次年度以降
12 R4-23	北目城跡	太白区東郷山2丁目	67.8	12.0	7月12～21日	井戸跡1、ピット3	E4 104-130	次年度以降
13 R4-24	南小泉遺跡	若林区南小泉4丁目	38.7	12.0	7月14日	板跡、遺物なし	E4 104-99	—
14 R4-25	鶴山道跡第321次	太白区鶴山6丁目	56.5	20.0	7月21～28日	板跡・木柱跡	E3 108-516	郡山
15 R4-26	北目城跡	太白区東郷山2丁目	65.2	12.0	7月26～28日	板跡、土器、遺物なし	E4 104-101	次年度以降
16 R4-27	若林町大字切石高橋跡	若林町大字切石高橋	52.4	12.0	8月1日	板跡、遺物なし	E4 104-112	—
17 R4-28	南小泉遺跡	若林区南小泉2丁目	50.5	12.0	8月2日	土坑、土師器	E4 104-126	—
18 R4-29	定日城跡	太白区東郷山2丁目	40.3	13.5	8月4～5日	板跡、近世陶器など	E4 104-138	—
19 R4-32	北目城跡	太白区山字字内田地	37.1	18.0	8月22～25日	板跡	E4 104-199	次年度以降
20 R4-36	戸内内蔵跡	太白区内蔵丸神社	63.6	12.0	9月5～6日	ピット2	E4 104-166	—
21 R4-37	鶴山道跡第322次	太白区鶴山6丁目	50.3	17.0	9月12～14日	板跡(直角大廣)・ピット	E4 104-169	郡山
22 R4-38	北目城跡	太白区東郷山2丁目	109.0	20.0	9月26～28日	土坑、板跡、ピット	E4 104-202	次年度以降
23 R4-41	内手遺跡	太白区山字字内手	47.2	12.0	10月11～12日	性格不明遺構	E4 104-213	—
24 R4-42	鶴山道跡第323次	太白区鶴山6丁目	54.0	12.0	10月17～19日	板跡2	E4 104-214	郡山
25 R4-44	鶴山道跡第324次	太白区鶴山3丁目	37.3	15.0	10月27日～11月2日	堅穴構築1・土坑1・性格不明遺構1・ピット1、土師器、鉄砲弾頭少量	E4 104-230	郡山
26 R4-48	南小泉遺跡	仙台市若林区蓬見堀2丁目	55.7	12.0	11月22～29日	板跡、近世瓦	E4 104-267	次年度以降
27 R4-51	南小泉遺跡	若林区南小泉3丁目	59.2	12.0	12月5日	板跡、遺物なし	E4 104-288	—
28 R4-53	鶴山道跡第326次	太白区鶴山3丁目	32.3	12.0	12月12～16日	土師器、須恵器	E4 104-78	郡山
29 R4-54	南小泉遺跡	若林区蓬見堀1丁目	55.7	12.0	12月12～14日	土師器、須恵器、近世瓦	E4 104-290	次年度以降

表3 本書収録調査一覧

調査番号	道路名	所在地	対象面積 (m ²)	調査面積 (m ²)	調査期間	遺構・遺物	発出等番	報告書
R2-29	南小泉遺跡	若林区蓬見堀1丁目	46.4	10.0	12月14～21日	堅穴構築1・土坑3・ピット4、土師器、陶磁器など	E2 101-305	第93次
R2-40	南小泉遺跡	若林区蓬見堀2丁目	51.6	15.0	12月14～22日	性格不明遺構1・ピット1、土師器、石製品	E2 101-312	第94次
R3-10	西台露跡	太白区西多賀3丁目	72.6	58.3	6月15～18日 7月30日	瓦多数	E3 108-39	第1次
R2-49	栗原露跡	仙台市太白区西多賀7丁目	97.4	24.0	2月24～26日	性格不明遺構2、遺物多量	E2 101-378	第3次
R3-32	北目城跡	太白区東郷山2丁目	54.0	12.0	11月1～8日	板跡	E3 108-315	第11次
R3-33	北目城跡	太白区東郷山3丁目	54.8	12.0	11月9～19日	板跡	E3 108-316	第12次
R3-34	北目城跡	太白区東郷山2丁目	59.6	12.0	11月8～19日	板跡	E3 108-274	第13次
R3-35	北目城跡	太白区東郷山2丁目	57.6	12.0	11月8～15日	板跡	E3 108-275	第14次
R3-37	北目城跡	太白区東郷山2丁目	57.6	12.0	11月29日～12月2日	ピット	E3 108-276	第15次



第1図 令和2～4年度 調査地点位置図（国土地理院地図を一部改変）

第2章 南小泉遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

南小泉遺跡は、仙台市の東部、JR 仙台駅の東南約 3.5 km の地点に位置する。広瀬川と名取川の合流地点より北へ約 3 km の場所にあり、「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野の自然堤防上に立地し、標高は 7 ~ 14m である。

本遺跡は昭和 14 年の霞ヶ丘飛行場拡張工事の際に弥生時代と古墳時代の遺構と遺物が発見されて以来、これまでに 92 次に及ぶ本发掘調査が行われ、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。特に弥生・古墳時代の集落跡として知られ、東北地方南部の古墳時代中期の土師器「南小泉式」の標式遺跡である。

また、遺跡内には遠見塚古墳があり、西部では若林城跡、北西部では養種園遺跡と接し、周辺には法領塚古墳、蛇塚古墳などが分布する。

第2節 第 93 次調査

1. 調査要項

遺跡名 南小泉遺跡（宮城県遺跡登録番号：01021）

調査地点 仙台市若林区遠見塚一丁目
127-1 の一部

調査期間 令和 2 年 12 月 14 日～12 月 21 日

調査対象面積 46.37 m²

調査面積 約 10.0 m²

調査原因 個人住宅建築工事

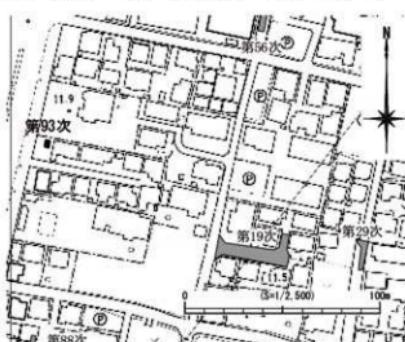
調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課
調査調整係

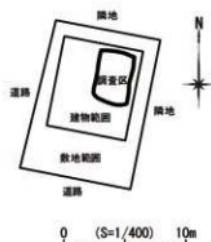
担当職員 主査 近藤勇亮 主事 柳澤 梶



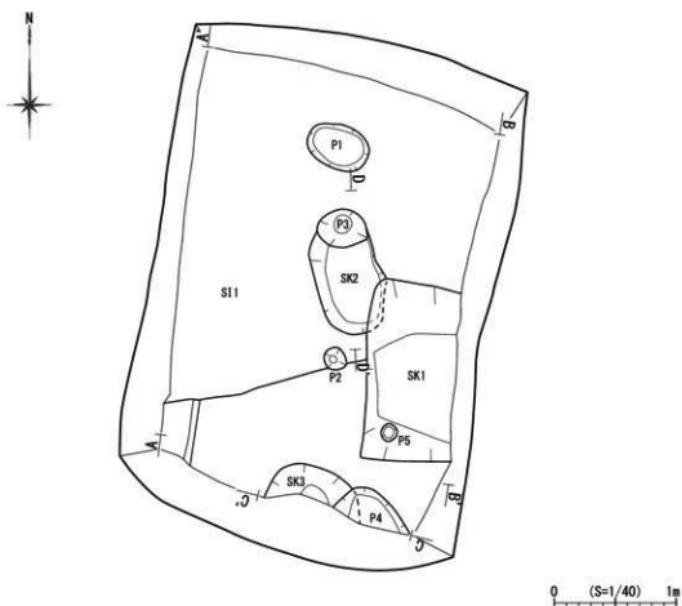
第2図 南小泉遺跡と周辺の遺跡



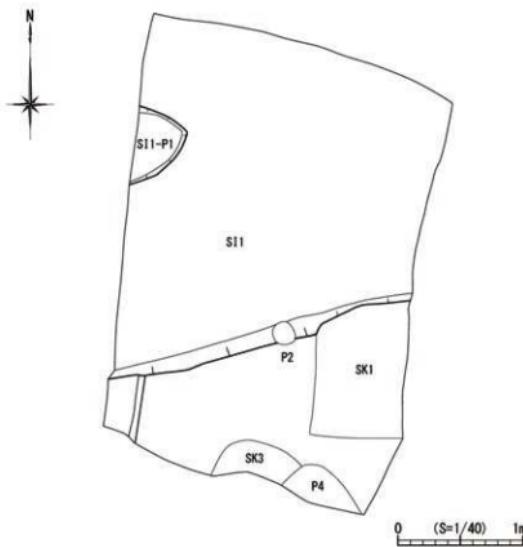
第3図 第 93 次調査区位置図



第4図 第 93 次調査区配置図



第5図 第93次調査区平面・断面図



遺構名	部位	色調	土質	備考・混入物
S11	1	10YR4/3 にら、黄褐色	粘土質シルト	暗褐色粘土ブロックをわずかに、酸化鉄を含む。
	2	10YR4/4 黒褐色	粘土質シルト	暗褐色粘土ブロック・炭化物（φ 1cm）をわずかに、灰黃褐色粘土ブロック、底面との境に炭化物を帯びる。部分的にグライ化。
S11-P1	1	10YR4/2 黒褐色	粘土質シルト	灰黃褐色粘土ブロック・酸化鉄、炭化物を多量含む。
SK1	1	10YR4/1 黒褐色	粘土	炭化物（φ 1 ~ 2cm）を多量、酸化鉄、且層ブロックを少量含む。ややグライ化。
SK2	1	10YR4/2 黒褐色	粘土質シルト	にら、黄褐色粘土ブロック（φ 1cm）、炭化物（φ 1cm）を含む。
SK3	1	10YR4/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄、且層ブロック（φ 1cm）、炭化物（φ 1cm）を少量含む。
	2	10YR4/2 黒褐色	粘土質シルト	且層も多量、炭化物（φ 1cm）を少量含む。
P1	1	10YR4/1 黒褐色	粘土質シルト	炭化物（φ 5mm）、且層ブロックを少量、酸化鉄を含む。
P2	1	10YR4/1 黑褐色	粘土質シルト	粘土質シルト
P3	1	10YR4/1 黑褐色	粘土	ほぼ均質。
P4	1	10YR4/4 墓褐色	粘土質シルト	且層ブロック（φ 1cm）、炭化物（φ 1cm）を少量含む。
P5	1	10YR4/1 黑褐色	粘土質シルト	ほぼ均質。

第6図 S11 穴遺構平面図

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、令和2年11月18日付で申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(令和2年11月24日付R2教文第101-305号で通知)に基づき実施した。対象地内に東西2.5m×南北4.0mの調査区を設定し調査を行い、重機により盛土および基本層Ⅰ層を除去後、Ⅱ層上面で遺構検出作業を行った。

遺構の記録は、調査区平面図および断面図(S=1/20)を作製し、記録写真的撮影はデジタルカメラを用いて行った。記録作業終了後、重機により埋戻しを行い、調査を終了した。

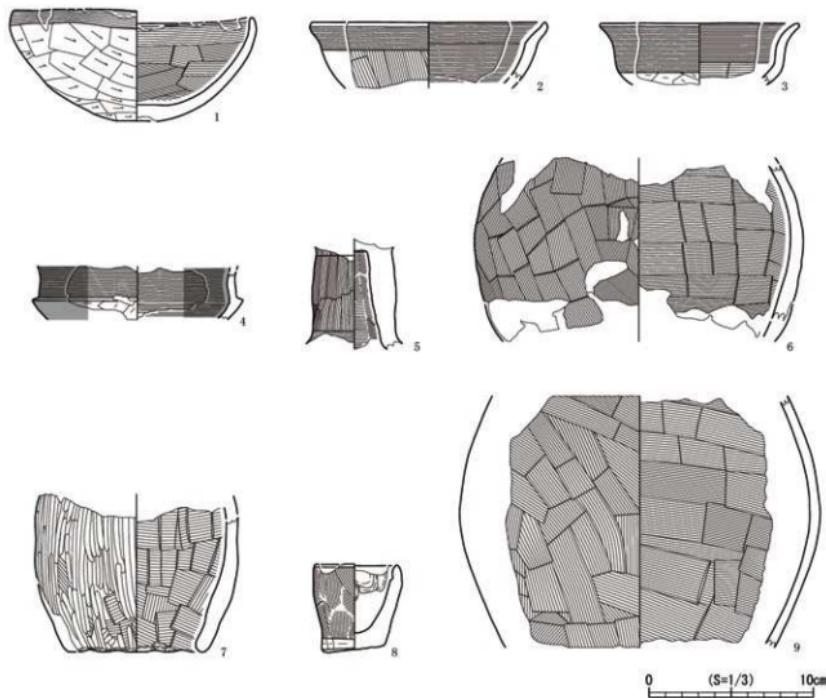
3. 基本層序

盛土の下に基本層を大別で2層、細別で3層確認した。遺構検出面であるⅡ層上面までの深さは約0.8mである。

I a層: 10YR3/3暗褐色粘土質シルト。炭化物粒(φ 1cm)を含む。西壁の一部で確認した。層厚は約0~30cmである。

I b層: 10YR4/2灰黃褐色粘土質シルト。酸化鉄を全体に含む。層厚は約0~40cmである。

II層: 10YR5/8黄褐色粘土質シルト。酸化鉄を含む。今回の調査の遺構検出面である。



0 (S=1/3) 10cm

図版 番号	登録 番号	出土 遺構	層位	種別	器種	重量 (cm)			外面	内面	備考	写真 図版
						口径	底径	高さ				
1	C-1	SII	床面	土師器	坪	(14.5)	2.4	6.7	口:ヨコナデ 体:ヘラケズリ 底面剥落	口:ヨコナデ 体:ヘラナデ	粘土練習 砂粒を含む 内面に茶色の付着物	2-3
2	C-5	SII	2	土師器	坪	(14.2)	-	(4.6)	口:ヨコナデ 体:ヘラナデ	ヨコナデ	粘土練習 砂粒少ない 内外面に茶色の付着物あり	2-6
3	C-8	SII	2	土師器	坪	(12.0)	-	(3.7)	口:ヨコナデ 体:ヘラケズリ	口:ヨコナデ 体:ヘラナデ	粘土練習 砂粒を含む 内面に茶色の付着物	2-4
4	C-9	SII	2	土師器	坪	-	-	(3.2)	口:ヨコナデ 体:ヘラケズリ・黒色焼附	口:ヨコナデ 体:ナメ付 壁面剥落 口縁部と体部の焼痕が比較的はっきりしている	粘土練習 砂粒を含む 内外面に茶色の付着物	2-5
5	C-6	SII	2	土師器	高脚 (脚部)	-	-	(6.7)	ヘラナデ ナデ	ナデ	粘土練習 砂粒を含む	2-7
6	C-2	SII	床面	土師器	坪	-	-	(10.7)	ヘラナデ 下部の器面剥落	ヘラナデ	粘土練習 砂粒を含む	2-10
7	C-4	SII	床面	土師器	板	-	(8.0)	(9.6)	開口:竪方向のヘラミガキ 孔部:粗面調査	開口:ヘラナデ 孔部:粗面調査	粘土練習 砂粒を含む	2-8
8	C-7	SII	2	土師器	手前土器	4.9	3.7	5.4	口:ナデ 底:ヘラケズリ	指印丸	粘土練習 砂粒を含む 内面に茶色の付着物	2-9
9	C-3	SII	床面	土師器	佛	-	-	(15.3)	ヘラナデ	ヘラナデ	粘土練習 砂粒を含む	2-11

第7図 SII 竪穴遺構出土遺物

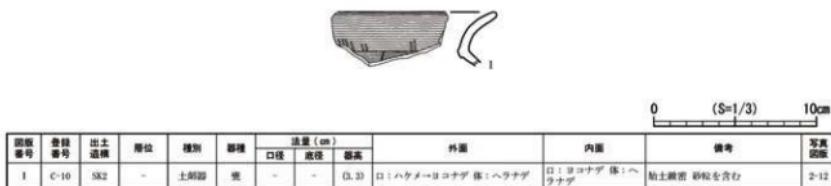
4. 発見遺構と出土遺物

調査では竪穴遺構1基、土坑3基、ピット5基が検出された。遺物は、基本層および各遺構から土師器、陶器、磁器が出土した。

(1) 竪穴遺構

SII 竪穴遺構 (第5・6図)

【位置】調査区のほぼ中央部で遺構の南東辺（検出規模約2.5m）が部分的に検出された。



第8図 SK2 土坑出土遺物

【規模・形態】部分的な検出であるため、平面形や規模は不明であるが方形を呈すると考えられる。

【堆積土】2層確認された。どの層も色調は基本層II層と類似するが、比較的やや粘土質でしまりが弱い。

【壁面】ほぼ垂直に立ちあがる。壁高は調査区西壁で最大約40cmである。

【床面】基本層II層を床面としている。貼床などは確認されなかった。

【床面施設】西側で土坑(SI1-SK1)が検出された。幅約65cmで、深さ7cmである。堆積土中には炭化物が多く含まれる。

【出土遺物】遺物は土師器の壺を中心に甕、瓶など163点出土した。壺は4点を掲載した。第7図1はほぼ完形の状態で出土した。口縁部がわずかに内側に屈曲しやや丸底だが、中央部は剥落による窪みが残る。第7図2・3は口縁部が緩やかに屈曲して開く。第7図4は全体の器形は不明であるが、体部中央に段を持ち口縁部にかけて直立気味に立ち上がる壺である。内面は外面の段に対応して屈曲し、沈線状にヨコナデの調整痕が残る。

甕は2点を掲載した。第7図6・9とともに体部のみの資料であり全体の形状は不明である。第7図5は高杯の脚部で中央部にやや膨らみを持つ。第7図7は無底单孔の瓶である。全体の形状は不明だが、入念なヘラミガキによって調整される。第7図8は手捏土器である。体部にやや膨らみがあり、内面の体部から底部にかけて黒色の付着物がみられる。

(2) 土坑

SK1 土坑（第5図）

調査区東側で検出された。SI1 壁穴遺構およびSK2 土坑と重複しており、いずれの遺構よりも新しい。規模は南北約1.5m、東西0.7m以上で、調査区外東側へ広がる。部分的な検出であるが平面形は方形を呈すると考えられる。断面形は皿形で深さ約0.3mである。堆積土は単層で炭化物が多く含まれる。遺物は土師器片、陶磁器片が8点出土したが図化できるものはない。

SK2 土坑（第5図）

調査区中央部で検出された。SI1 壁穴遺構より新しく、SK1 土坑およびP3 より古い。平面形は梢円形で長軸0.9m、短軸0.6mである。断面形は皿形で深さ約0.2mである。遺物は土師器片が5点出土し、そのうち1点を掲載した。第8図1は甕で口縁部はやや外反する。

SK3 土坑（第5図）

調査区南端で検出された。P4 より古い。規模は東西0.8m、南北0.3m以上で、調査区外南側へ広がる。部分的な検出のため平面形は不明である。断面形は台形で深さ約0.6mである。遺物は須恵器片が1点、土師器片が1点出土したが図化できるものはない。

(3) ピット（第5図）

5基検出された。いずれも柱痕跡は確認されなかった。平面形はP1が梢円形でP2・3・5が円形である。P4は部分的な検出で調査区外南側へ広がるため平面形は不明である。規模は幅約10cm～65cmである。遺物はP1から土師器片が3点出土したが図化できるものはない。

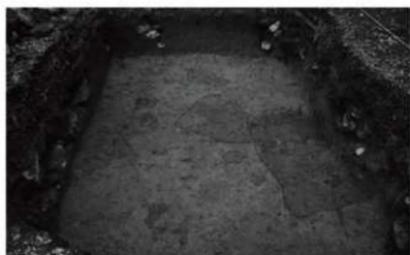
5.まとめ

今回の調査地点は南小泉遺跡の中央部からやや南西側に位置する。調査では竪穴遺構1基、土坑3基、ピット5基が検出され、土師器、須恵器、陶磁器が出土した。

SI1 竪穴遺構ではカマドや柱、周溝などの施設は確認されなかったが、ほぼ垂直に掘り込まれていることと、底面が平坦であったことから竪穴遺構とした。SI1 竪穴遺構の床面からは丸底状の杯（第7図1）やヘラミガキを入念に行った瓶が出土している。これらは南小泉式の特徴であり、遺構の帰属時期は古墳時代中期頃と推定される。また、SK1 土坑からは陶磁器が出土しているため近世の遺構であると考えられる。その他の遺構は明確な時期決定資料がないため、詳細は不明である。

参考文献

- 仙台市教育委員会 1990 『南小泉遺跡 第16～18次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第140集
仙台市教育委員会 1994 『南小泉遺跡 第22次・23次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第192集
仙台市教育委員会 2004 『鴻ノ巣遺跡第7次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第280集



1. 遺構検出状況（南から）



2. 土坑、ピット完掘状況（北から）



3. SI1 竪穴遺構床面検出状況（北から）



4. SI1 竪穴遺構土層断面（西壁）

写真図版1 南小泉遺跡第93次調査（1）



1. SII 堅穴遺構完掘状況（北から）



2. 調査風景



3
(第7図1)



4
(第7図3)



5
(第7図4)



6
(第7図2)



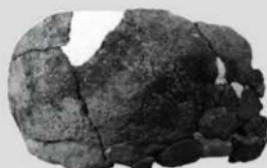
7
(第7図5)



8
(第7図7)



9
(第7図8)



10
(第7図6)



11
(第7図9)



12
(第8図1)

写真図版2 南小泉遺跡第93次調査(2)・出土遺物

第3節 第94次調査

1. 調査要項

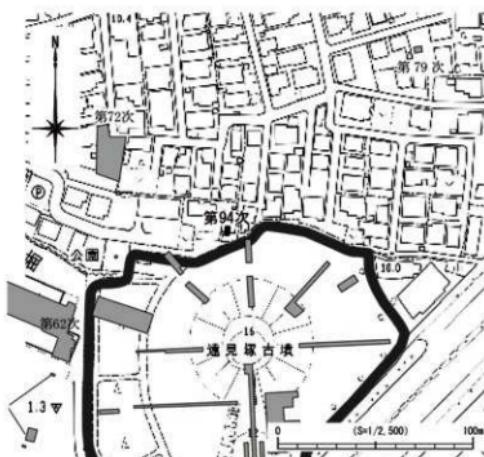
遺跡名	南小泉遺跡（宮城県遺跡登録番号 01021）
調査地点	仙台市若林区遠見塚二丁目 309-23
調査期間	令和2年12月16日～22日
調査対象面積	51.57 m ²
調査面積	15.0 m ²
調査原因	個人住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	主任 小浦真彦 主事 澤田雄大

2. 調査に至る経過と調査方法

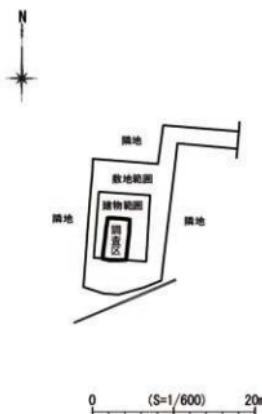
今回の調査は、令和2年11月20日付で申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和2年11月26日付R2教生文第101-312号で通知）に基づき実施した。

対象地内に東西3.0m×南北5.0mの調査区を設定し調査を行った。重機により盛土および基本層I・IIa層を除去後、IIb層上面(GL-0.45～0.5m程度)で遺物が出土したため遺構検出作業を行ったが、遺構は確認されなかつた。その後、さらに重機によりIIb・III・IV層を除去し、V層上面で再度遺構検出作業を行った結果、性格不明遺構とピットが検出された。

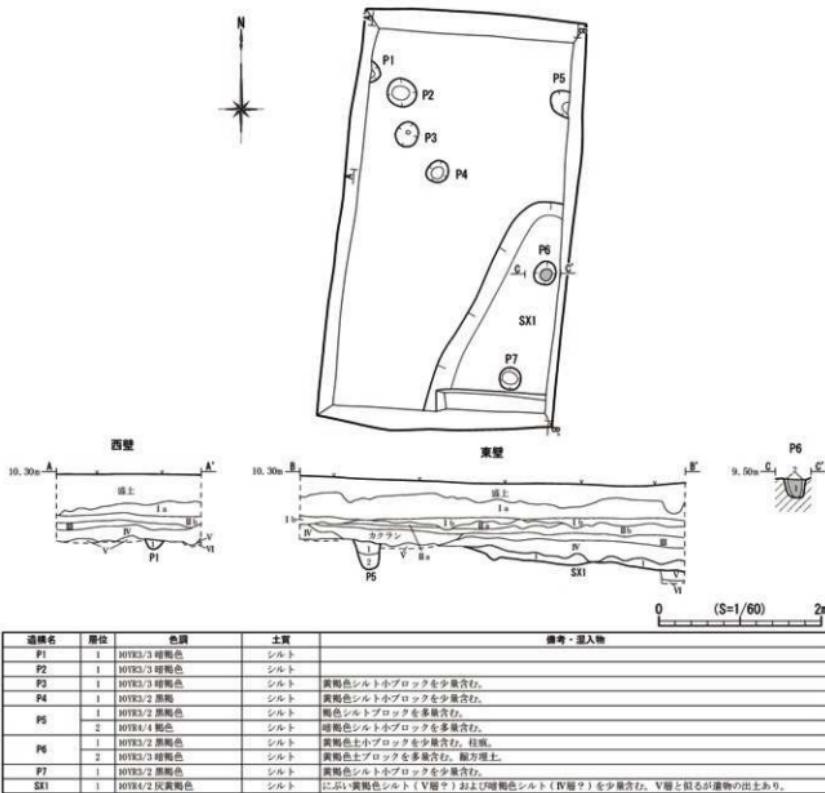
遺構の記録は、調査区平面図および断面図(S=1/20)を作製し、記録写真的撮影はデジタルカメラを用いて行った。記録作業終了後、重機により埋め戻しを行い調査を終了した。



第9図 第94次調査区位置図



第10図 第94次調査区配置図



第11図 第94次調査区平面・断面図

3. 基本層序

盛土の下に本基層を大別で6層、細別で8層確認した。遺構検出面であるV層上面までの深さは約0.9mである。

I a層：10YR4/4 褐色シルト。炭化物粒やにぶい黄褐色土小ブロックを少量含む。盛土以前の畠耕作土層と考えられる。層厚は約29cmである。

I b層：10YR3/4 暗褐色シルト。にぶい黄褐色土ブロックを少量含む。層厚は約12～16cmである。

II a層：10YR3/2 黒褐色シルト。暗褐色土ブロックを多量に含む。層厚は約9～14cmである。

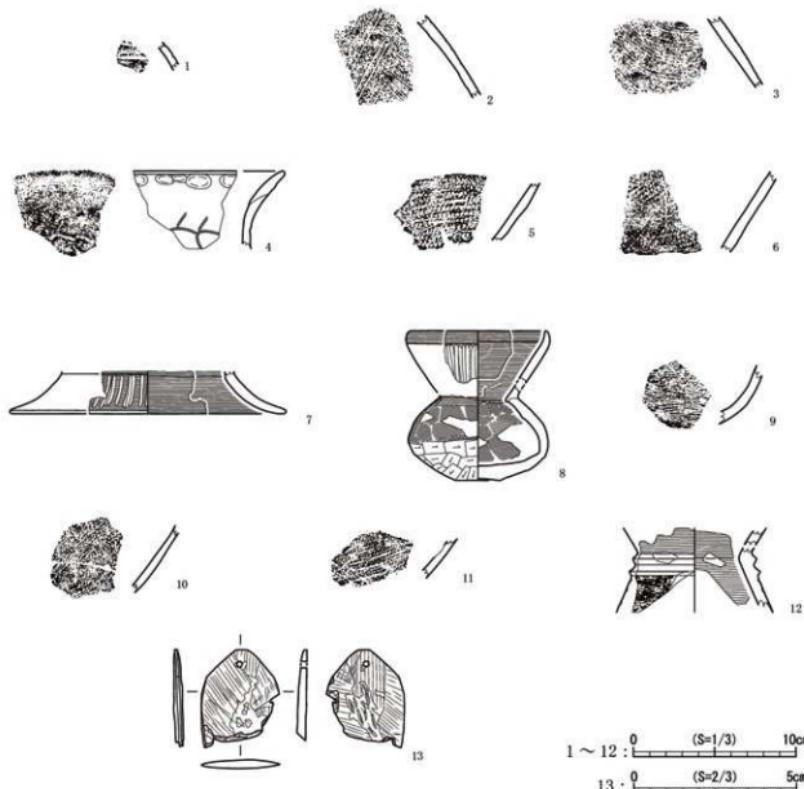
II b層：10YR3/3 暗褐色シルト。黒褐色土・黄褐色土ブロックを少量含む。層厚は約7～17cmである。

III層：10YR3/2 黑褐色シルト。黄褐色土ブロックを少量含む。酸化鉄粒を少量含む。層厚は約7～13cmである。

IV層：10YR3/3 暗褐色シルト。黄褐色土を多量に含み、下層との漸移が顕著にみられる。層厚は約20～28cmである。

V層：10YR5/4 にぶい黄褐色シルト。IV層ブロックを少量含む。今回の遺構検出面である。層厚は約30cmである。

VI層：10YR4/6 褐色砂質シルト。層厚は約7cm以上である。



図版 番号	登録 番号	出土 遺構	部位	種別	基埋	法量 (cm)			外観	内面	備考	写真 図版
						口径	底径	厚さ				
1	B-1	SX1	堆積土	弥生土器	直	-	-	-	平行火照 斜め彫文 (植物茎葉文)	ミガキ	粘土繊密 研粒を含む	4-5
2	B-3	SX1	堆積土	弥生土器	直	-	-	-	同時施文平行火照による重複彫文 (縦幅1.0mm 縦距4mm, 3.5mm)	ナゲ	粘土繊密 研粒を含む 十三塙式	4-6
3	B-4	SX1	堆積土	弥生土器	直	-	-	-	同時施文平行火照 (3条)による重複 彫文 上半は彫文の可能性がある 縦幅7~8mm 2継間隔1.7~2.2mm	ナゲ	粘土繊密 研粒を含む 十三塙式	4-7
4	B-5	SX1	堆積土	弥生土器	直	-	(4.8)	-	口:縫剖に指すやエ瓶 体:柄系文	ナゲ	粘土繊密 研粒を含む	4-8
5	B-6	SX1	堆積土	弥生土器	直	-	(3.5)	-	LH彫文	ナゲ+ミガキ	粘土繊密 研粒を含む 南浦骨針を 含む	4-9
6	B-8	SX1	堆積土	弥生土器	直	-	-	-	LH彫文→一部ナゲ	ナゲ	粘土繊密 研粒を含む 南浦骨針を 含む	4-10
7	C-2	P2	堆積土	土師器	高脚	-	(17.0)	(2.6)	ヨコナガテ→ミガキ	ヨコナゲ	粘土繊密 研粒を含む	4-11
8	C-1	P2	I	土師器	直	(8.4)	2.8	(9.2)	口:ヨコナゲ 縫:ミガキ 体:上半ナ ゲ 下半ヘラケズリ	ヨコナゲ	粘土繊密 研粒を含む	4-12
9	B-10	P4	I	弥生土器	直	-	-	-	柄系文	ナゲ	粘土繊密 研粒を含む	4-13
10	B-7	B	弥生土器	直	-	-	(4.2)	-	柄系文	ナゲ	粘土繊密 研粒を含む	4-14
11	B-9	B	弥生土器	直	-	-	-	-	柄系文	ナゲ	粘土繊密 研粒を含む	4-15
12	B-2	V	弥生土器	直	-	-	(5.6)	-	口:ナゲ 縫:横割に断面三角形の突起 をもつる 縫:同時施文平行火照 による重複彫文	ナゲ	粘土繊密 研粒を含む 十三塙式	4-16

図版 番号	登録 番号	出土 遺構	部位	種別	基埋	法量 (cm)			備考	写真 図版
						長さ	幅	厚さ		
13	E-1		B	石製品	研磨品	(3.0)	(2.4)	(0.25)	穿孔→両面研磨 剣形石製機造品 砧板部 重さ 2.9g	4-17

第12図 第94次調査出土遺物

4. 発見遺構と出土遺物

調査では性格不明遺構1基、ピット7基が検出された。

(1) 性格不明遺構

SX1 性格不明遺構（第11図）

調査区南東側で検出された。P6・7より古い。遺構の東側・南側は調査区外へ広がっているため、平面形は不明である。規模は東西1.5m以上・南北2.6m以上、深さ約20cmで堆積土は単層である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面に凹凸が存在することから竪穴遺構ではなく性格不明遺構とした。遺物は堆積土から弥生土器が出土した。第12図2・3のような平行沈線の組み合わせによる重山形文や連弧文、溝文などは弥生時代中期中葉頃からみられるが、今回出土した土器は多条化した平行線施文具により文様が描かれている。これは中期後葉頃の特徴であり十三塚式に類似する。よって、遺構の年代は弥生時代中期後葉以降と判断される。

(2) ピット（第11図）

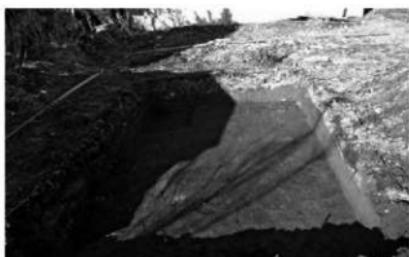
7基検出され、そのうちP6では柱痕跡が確認された。規模は径25～35cm、深さはP1・2・7が約9～12cm、P3～6が約25～35cmである。P2・5・6は約2.0m間隔で直交する位置関係にあり、何らかの建物を構成していた可能性も考えられる。P3からは土師器が少量出土した。

(3) その他の出土遺物

基本層II～IV層から弥生土器、土師器、石製模造品等が出土した。石製模造品は剣形と推定され、しのぎ鍔を作らず端部に穿孔している。

5.まとめ

今回の調査地点は南小泉遺跡内のほぼ中央かつ遠見塚古墳の北側に位置する。近隣では対象地と隣接する北東側で確認調査が行われており、盛土直下から旧河川跡が確認されている。今回の調査では性格不明遺構1基とピット7基が確認された。石製模造品は遠見塚古墳第3次調査でも出土した石製模造品と同形である。検出面より上層から出土したため遺構との関連は不明だが、こうした祭祀遺物とされる石製品の存在により周辺に遠見塚古墳と関わる遺構群の存在が推測される。

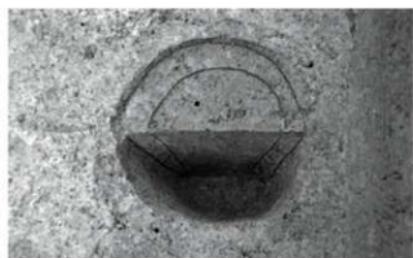


1. II b層上面遺構検出状況（南から）



2. V層上面遺構検出状況（南から）

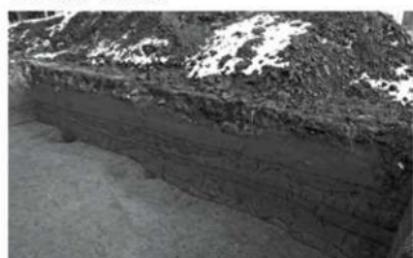
写真図版3 南小泉遺跡第94次調査（1）



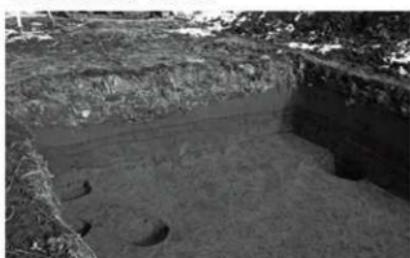
1. P6 断面（南から）



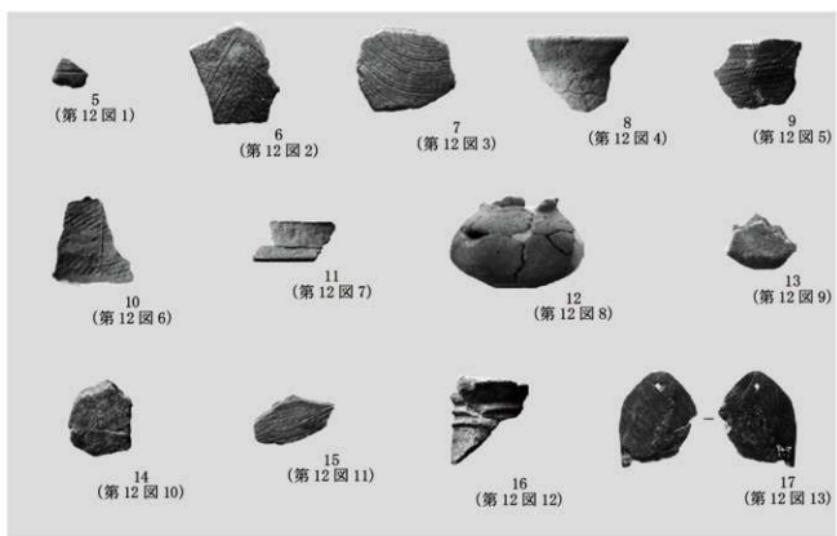
2. 遺構完掘状況（南から）



3. 調査区東壁土層断面（南西から）



4. 調査区北壁土層断面（南から）



写真図版4 南小泉遺跡第94次調査(2)・出土遺物

第3章 西台窯跡の調査

第1節 遺跡の概要

西台窯跡は、仙台市南部の太白区西多賀三丁目に所在する。JR長町駅から西に約2.7kmの地点に位置する。名取川の左岸の標高約34mの台地の裾部に立地する。

窯跡の存在は戦前から知られており、1950年に刊行された『仙臺市史3 別編1』の「第4章 奈良平安時代の遺跡 六、富澤の瓦窯址」には「木戸口瓦窯址」と「西台瓦窯址」が記載されている。木戸口瓦窯址は現在は「富沢窯跡(11)」として登録されており、1970年に発掘調査が行われ、5世紀代の埴輪窯跡が発掘されている。またそれ以外にも窯跡が存在したとされ、窯跡が台地の斜面に露頭し、瓦や窓体などが出土したことが記録されている。「西台瓦窯址」が、現在は西台窯跡として登録された本遺跡である。出土した資料の一部は『東北古瓦図譜』にも掲載されており、現在も奈良国立博物館には焼け歪んだ丸瓦と、7世紀末～8世紀初頭の陸奥国府である郡山遺跡およびその付随寺院である郡山廢寺から出土したものと同紋の軒丸瓦が収蔵されている。これまで発掘調査が行われたことはなく、市街地化の進行によりその実態については不明な点が多い。

その他にもこの周囲には古墳時代中期の須恵器が表採されている金山窯跡(14)や、横穴墓とともに7世紀中葉以前と推測される窯跡が発見された土手内窯跡(16)なども所在しており、東北地方でも比較的古い時期の窯跡が点在する地域である。また原遺跡(2)からは埴輪を伴う5世紀代の古墳群が発見されており、近在する富沢窯跡で発掘された埴輪窯との関係がうかがわれる。

第2節 第1次調査

1. 調査要項

遺跡名 西台窯跡(01211)

調査地点 仙台市太白区西多賀三丁目 201番

14、446番2

調査期間 令和3年6月15日、17日～18日
(擁壁範囲)

令和3年7月30日(個人住宅建築
範囲)

調査対象面積 72.64 m²

調査面積 58.27 m² (44.54 m²+13.73 m²)

調査原因 個人住宅の建築工事及び擁壁工事

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 主査 及川謙作 菅原翔太

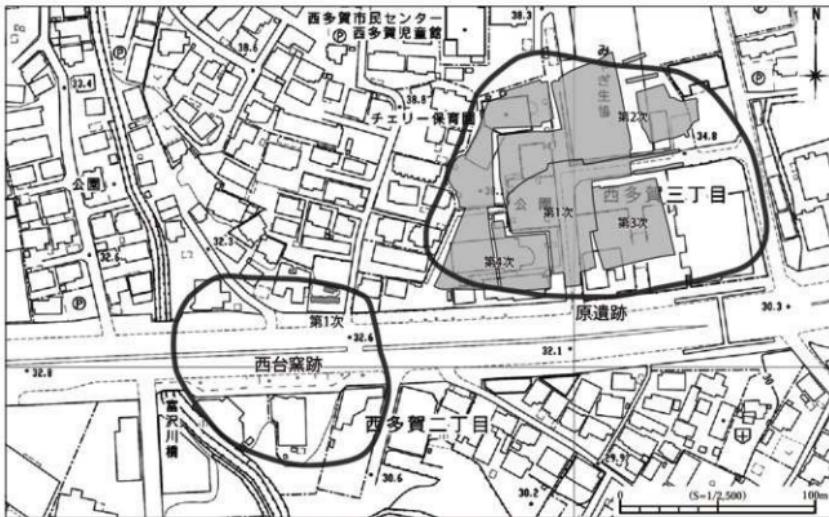
主任 堀江洋介

主事 柳澤 楓 早川太陽

番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	西台窯跡	窯跡	段丘	奈良・平安
2	石垣跡	古墳、集落跡	段丘	縄文～平安
3	宝珠ノ台遺跡	散布地	自然堤防	縄文
4	原ノ内窯跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
5	上野窯跡	集落跡	段丘	縄文
6	山手条里窯跡	条里遺構	段丘	縄文
7	後田田跡	散布地	丘陵斜面	奈良・平安
8	八幡窯跡	散布地	丘陵麓	古墳
9	芦ノ口窯跡	集落跡	丘陵	縄文・弥生・平安
10	三井古墳群	円墳	段丘	古墳
11	坂代古墳	雲梯	段丘	古墳・御陵・平安
12	三井古墳跡	集落跡	段丘	縄文
13	土手内横穴墓群と地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳
14	9号山古墳	雲梯	段丘	古墳
15	土手内窯跡	窯跡	丘陵	古墳
16	土手内横穴墓群B地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳・御陵
17	西側東塚跡	散布地	丘陵麓	平安
18	東東塚跡	台地	段丘	古墳・御陵・平安
19	東北渕木遺跡	散布地	自然堤防	奈良・平安
20	東北塚跡	水田跡、台地	海抜堤地	羽衣郡～近世
21	山口遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背堤地	縄文～近世

第13図 西台窯跡と周辺の遺跡

第2節 第1次調査



第14図 第1次調査区位置図

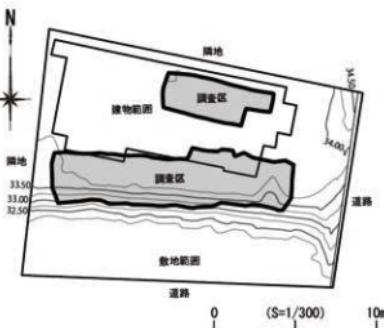
2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者より令和3年6月2日付で提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和3年6月14日付、R2教生文第108-89号で通知）に基づき実施した。

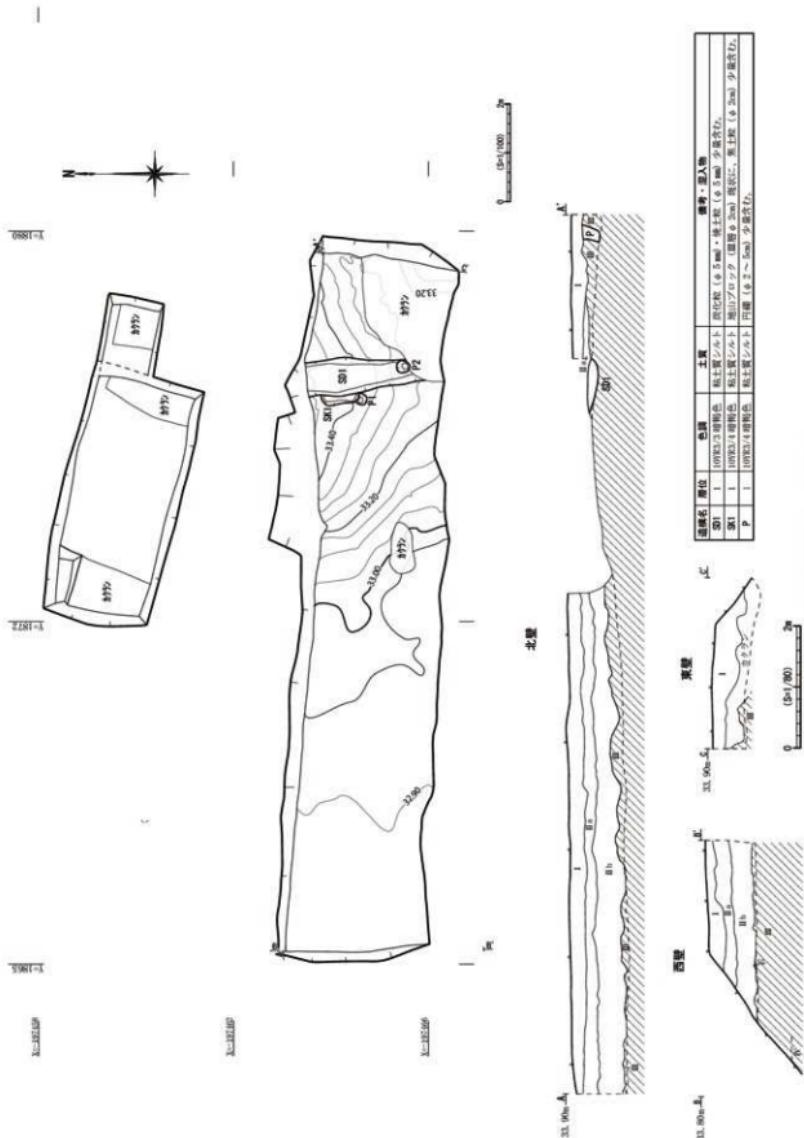
重機掘削前に現地踏査を行い、遺物の採集と現況の計測を行った。その後人力で法面の精査を行い、遺構検出面であるIII層までの深度と、粘土層であるIV層を確認した。また基本層I～II層中に瓦が含まれていることを確認した。調査では最初に擁壁工事予定地内に東西15.0m×南北3.0mの調査区を設定し、重機によりI・II層を除去後、基本層III層（GL -0.2～0.9m）上面で遺構検出作業を行った。その結果、溝跡1条と土坑1基、ピット2基が検出された。遺物はI～III層上面から桶巻造りの平瓦と丸瓦などがテン箱3箱分出土した。

また擁壁工事終了後に、住宅建築工事予定地内の北東側に東西約5.0m×南北約2.5mの調査区を設定してGL-0.6mまで掘削し、基本層III層（GL -0.6m）で遺構検出作業を行った。その結果遺構は検出されなかったが、須恵器片が1点出土した。

遺構の記録は調査区平面図（S=1/20・1/30）および調査区土層断面図（S=1/20）、土層柱状図（S=1/30）を作製し、デジタルカメラにより写真記録を行った。記録作業終了後、擁壁部分の調査の際には埋め戻さず現況で引き渡し、住宅建築範囲の調査の際には、重機により埋戻しを行い、調査を終了した。



第15図 第1次調査区配置図



第2節 第1次調査

3. 基本層序

今回の調査では、既存建物の整地層であるI層をはじめ、基本層を大別で4層、細別で5層確認した。遺構検出作業を行ったIII層までの深さは約0.2～0.9mである。

- I 層：10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。III層ブロックを斑状に含む。層厚は約10～50cmである。調査前に解体された建物に伴う造成盛土である。
- II a層：10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。比較的均質であるものの瓦と円礫を少量含む。層厚は約0～30cmである。調査区の西側で確認されている。畑の耕作層である。
- II b層：10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。丸礫は多量に、瓦を少量含む。層厚は約0～50cmである。調査区の西側で確認されている。畑の耕作層である。
- III 層：10YR6/8 明黄褐色凝灰岩質シルト。粘性はなく、しまりは堅固である。土質はほぼ均質で、土色は下層に行くほど赤色に変化する。層厚は約55cmである。今回の調査の遺構検出面である。
- IV 層：10YR7/6 明黄褐色粘土。粘性、しまりとも強い。均質な層である。層厚は約15cm以上である。瓦の材料として使用された可能性がある。

4. 発見遺構と出土遺物

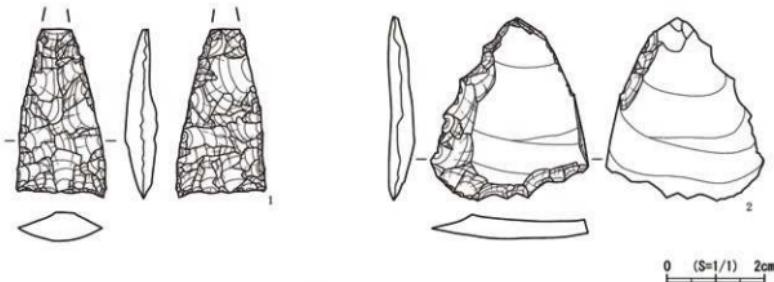
今回の調査では擁壁範囲調査区から溝跡1条、土坑1基、ピット2基が検出された。遺物は基本層第I～III層上面から桶巻造りで凸面縄叩きの後ナデケシ調整の平瓦、凸面縄叩き後ナデケシ調整の丸瓦、須恵器、石礫などが出土した。

SD1 溝跡（第16図）

調査区の東側で検出された。SK1 土坑とP2と重複しこれらよりも新しい。方位はN-5° -Wである。検出長は2.4m、幅は約48～78cm、深さは約6～10cmで、断面形状はやや開いた皿形を呈する。堆積土は10YR3/3 暗褐色の粘土質シルトで、炭化粒と焼土粒が混入する。遺物は出土していない。

SK1 土坑（第16図）

調査区の東側で検出された。SD1 溝跡とP1と重複し、SD1よりも古く、P1よりも新しい。平面形状は細長い小判形を呈する。検出規模は南北約78cm、東西約24cm、深さは約10cmである。断面形状はやや開いた皿形を呈する。堆積土は10YR3/4 暗褐色の粘土質シルトで、炭化粒と焼土粒が混入する。遺物は出土していない。

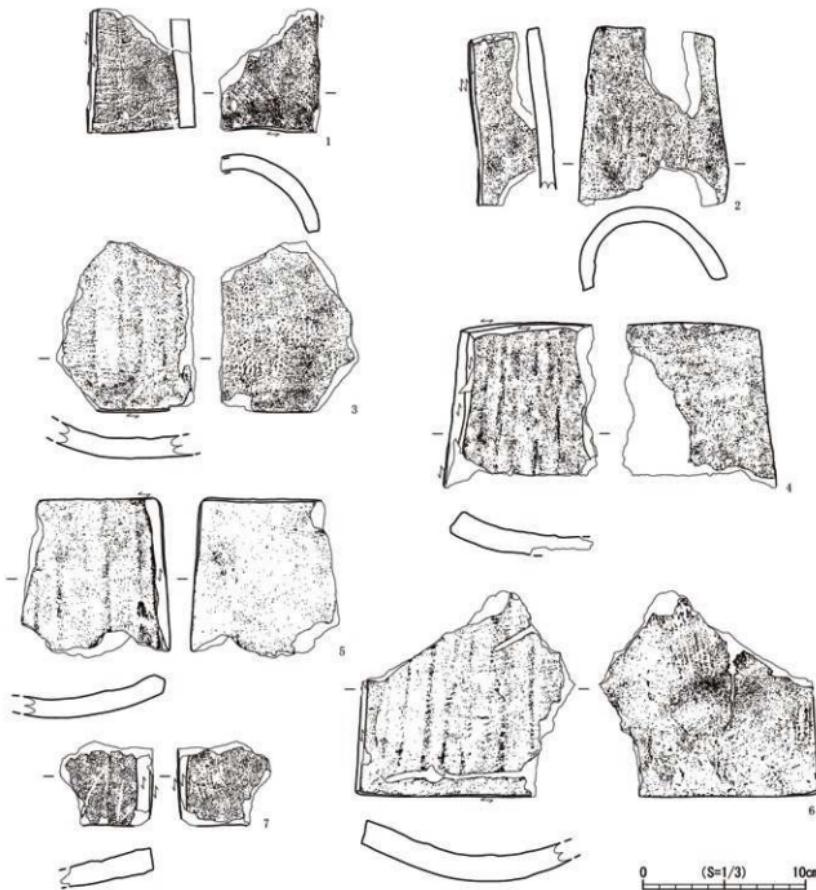


回復 番号	登録 番号	部位	種別	基種	法面 (cm)			備考	写真 図版
					高さ	幅	厚さ		
1	E-1	II	石器	石器	(3.4)	1.8	0.6	瓦器 重さ3.3g	6-1
2	E-2	表探	石器	二次加工のある削片	3.8	3.2	0.4	瓦器(赤色) 重さ5.4g	6-2

第17図 第1次調査出土遺物（1）

ピット（第16図）

調査区の東側で検出された。平面形状はいずれも円形を呈し、規模は23～27cm、深さは約10～15cmである。遺物は出土していない。



図版 番号	骨格 種類	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	広延幅 (cm)	鉛垂幅 (cm)	厚さ (cm)	備考	写真 図版
1 F-3	表振	矢瓦	(12.7)	(10.3)	-	-	1.7	凸面：溝切き→ナデケシ（横方向？）凹面：布目板端部付近をほつれ 端部ヘラケズリ 板土板合せ目 骨針状物質？ごく微量に含む	6-3
2 F-1	表振	矢瓦	(18.3)	15.3	-	11.9	1.7	凸面：溝切き→ナデケシ 凹面：布目板 布合せ目板 端部ヘラケズリ おびただしく還元	6-4
3 G-1	-	平瓦	(17.5)	(14.6)	-	-	2.1	凸面：溝切き→横方向ナデケシ 凹面：布目板 細切板 梶骨板 端部ヘラケズリ 骨針状物質？ごく微量に含む	6-5
4 G-2	-	平瓦	(15.4)	(15.1)	-	-	2.5	凸面：溝切き 端部ヘラケズリ→横方向ナデケシ 凹面：布目板 幸切板 梶骨板 端部ヘラケズリ 板土板合せ目	6-6
5 G-3	1～面	平瓦	(16.2)	(15.1)	-	-	2.2	凸面：溝切き→ナデケシ（横方向？）凹面：布目板 梶骨板 端部ヘラケズリ	6-7
6 G-4	1～面	平瓦	(21.0)	(21.0)	-	-	3.0	凸面：溝切き→横方向ナデケシ 凹面：布目板 梶骨板 下端附近括り細板？ 端部ヘラケズリ	6-8
7 G-5	表振	平瓦	(8.5)	(9.6)	-	-	2.5	凸面：溝切き→横方向ナデケシ 凹面：布目板 梶骨板 端部ヘラケズリ 骨針状物質？ごく微量に含む	6-9

第18図 第1次調査出土遺物（2）

第2節 第1次調査

5.まとめ

今回の調査地点は西台窯跡の北東側とその隣接地に位置し、三神峯丘陵南端に位置する。現状は宅地となっているが、旧地形は南西から北東に向けて標高が高くなっている。調査の結果、窯に関わる遺構は検出されなかつたが、瓦を中心に遺物が一定量出土したことから、北もしくは東側に隣接する範囲に窯跡が存在する可能性が高い。今回の調査で瓦は100点、13,403g出土したが、その内訳は、平瓦は42点で10,055g、丸瓦は23点で2,363g、その他に不明瓦が35点で985gであり、平瓦と丸瓦の重量比は4.3:1である。瓦の胎土は基盤層である凝灰岩由来と推測される白色粒子（φ1~4mm）が目立つ。それ以外にも透明粒子や赤色粒子などが含まれている。骨針状物質は一見すると混入は確認できないものの、ごく微量にそれらしいものを含むものも存在する。

今回の調査で出土した平瓦は、いずれも桶巻造りで成型の際には凸面に縄叩きが施されている。丸瓦は全体像がうかがえる資料は出土してはいないもののいずれも無断式であると推測され、やはり凸面には縄叩きが施されている。同様の特徴の瓦は、当遺跡の東約3.2kmの位置に所在する郡山遺跡や大野田官衙遺跡などから出土している。特に郡山遺跡の南側の郡山廃寺からは大量の瓦が出土しているが、確認されている瓦の叩きはいずれも縄叩きのみである。それに対してⅡ期官衙城からは縄叩きに加え格子叩きや平行叩きの瓦も出土しており、両地域から出土している瓦の様相は異なっていることが指摘されている。今回の調査で西台窯跡からは縄叩きを施した瓦のみしか確認されず、また周囲からは郡山廃寺と同じ紋様の瓦が出土していることから、西台窯跡とその周囲で郡山廃寺の瓦は生産されていたものと推測される。

なお今回調査を行った範囲の内、丘陵の裾から北側は遺跡外であったが、その範囲からも遺物が出土したことから、今回の調査を行った敷地全体を含む形で遺跡範囲の拡張を行った（令和3年10月15日付R3教生文第2320号で宮城県教育委員会に進呈。令和3年10月27日付文第2107号で宮城県教育委員会から通知）。

引用・参考文献

及川謙作 2021「陸奥国府における造瓦技術の受用と変遷（1）—郡山遺跡の瓦を中心にして—」『宮城考古学 第23号』
及川謙作 2022「陸奥国府における造瓦技術の受用と変遷（2）—大蓮寺窯跡と東北各地から出土した瓦との比較を中心にして—」『宮城考古学 第24号』

仙台市教育委員会 2004『郡山遺跡発掘調査報告書 総括編』仙台市文化財調査報告書第285集

仙台市史編纂委員会 1950『仙臺市史3 別編1』



第19図 1952年頃の西台窯跡・原遺跡周辺の空撮写真



1. 法面基本層確認状況（東から）



2. 捩壁範囲調査区東壁土層断面（西から）



3. 捩壁範囲調査区西壁土層断面（東から）



4. 捩壁範囲調査区遺構検出状況（西から）



5. 捩壁範囲調査区遺構検出状況（東から）



6. SDI溝跡完掘状況（北から）



7. 捩壁範囲調査区全景（北東から）



8. 住宅範囲調査区Ⅲ層上面検出状況（東から）

写真図版5 西台窯跡第1次調査



写真図版6 西台窯跡第1次調査出土遺物

第4章 栗遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

栗遺跡は仙台市太白区西中田に所在する。JR 東北本線南仙台駅の南西約 1.0 km の地点に位置し、遺跡の南方約 250m からは名取市となる。遺跡は名取川下流域の右岸に広がる沖積地帯の自然堤防上に立地する。周辺は後背湿地と旧河道が複雑に入り組んでおり、かつては名取川の氾濫を何度も受けたことが知られている。昭和 40 年代後半から開始された中田地区土地区画整理事業に伴い盛土造成されたことで旧来の地形は失われており、周辺は小学校および住宅地となっている。

本遺跡は、昭和 20 年代に遺跡上の畠地開墾に際して多数の土師器が出土したことから、古代の集落跡として知られるようになった。出土する土師器が单一の型式を示すものが多いことから、同型式の土師器をおおよそ 7 世紀頃の年代観を示す「栗圓式」と呼称するようになり、標式遺跡として認知されている。第 1 次調査は昭和 49・50 年度に土地区画整理事業に伴う道路建設に先立ち実施され、竪穴住居跡 18 軒、溝跡 1 条、土坑 15 基などが確認されている。また、第 2 次調査は昭和 56 年度に学校建設に伴って実施され、竪穴住居跡 23 軒、溝跡 4 条、土坑 9 基などが確認され、第 1 次調査の確認構造も含めて 7 世紀初頭～7 世紀末頃の間にわたり 4 時期の集落が営まれたことが確認されている。

第2節 第3次調査

1. 調査要項

遺 跡 名 栗遺跡

(宮城県遺跡登録番号 01038)

調 査 地 点 仙台市太白区西中田七丁目 14-13

調 査 期 間 令和 3 年 2 月 24 日～3 月 3 日

調査対象面積 97.41 m²

調査面積 24.0 m²

調査原因 個人住宅建築工事

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育局生涯学習部

文化財課調査調整係

担当職員 主査 近藤勇亮

主任 小浦真彦

主事 澤田雄大 木村 恒

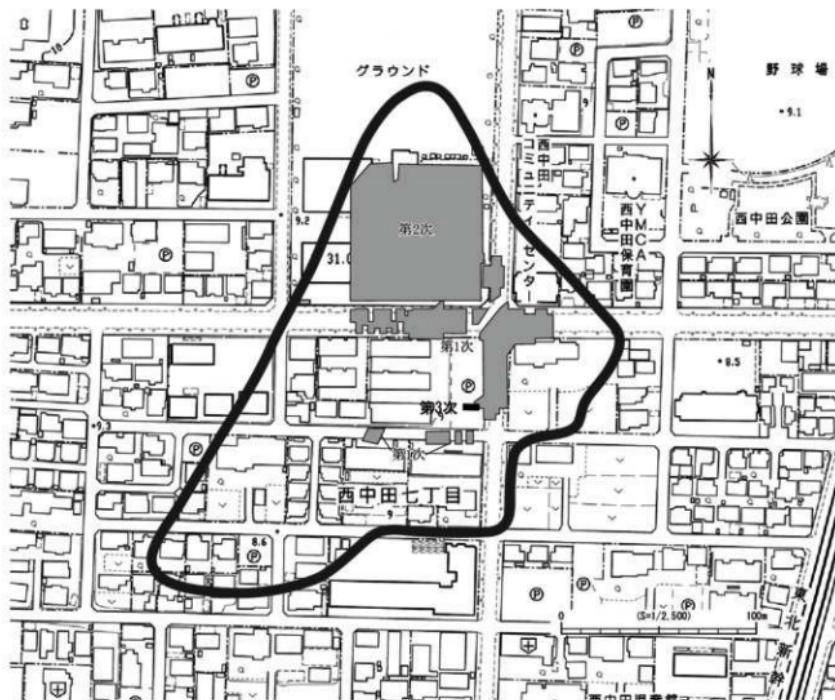
2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、令和 3 年 1 月 8 日付で申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(令和 3 年 1 月 13 日付 R2 教生文第 101-378 号で通知)に基づき実施した。対象地内の東側に、東西 8.0m × 南北



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	便道跡	集落跡	自然堤防	弥生～平安
2	柱木遺跡	集落跡	自然堤防	平安～近世
3	便道跡	散在地	自然堤防	古代
4	便道跡	台地	自然堤防	古墳、奈良、平安
5	神明台遺跡	台地	自然堤防	古墳、古代
6	便道跡	散在地	自然堤防	古代
7	石垣田遺跡	散在地	自然堤防	古墳、古代
8	水木遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～平安
9	便道跡	集落跡	自然堤防	後晉～平安
10	中田町社前遺跡	台地	自然堤防	古墳、平安
11	便道跡	集落跡、散在地	自然堤防	弥生～近世
12	便道跡	散在地	自然堤防	中世
13	便道跡	台地	自然堤防	奈良～平安
14	中田北遺跡	台地	自然堤防	奈良～平安
15	中田南遺跡	集落跡、散在地	自然堤防	奈良～平安
16	上永田遺跡	散在地	自然堤防	弥生～平安

第 20 図 栗遺跡と周辺の遺跡



第21図 第3次調査区位置図

3.0mの調査区を設定し調査を行った。重機により盛土を除去し、基本層Ⅰ層上面で遺構検出作業を行った。調査区の東半部には擾乱が広がっていたが、調査区の西半部において遺構が確認された。

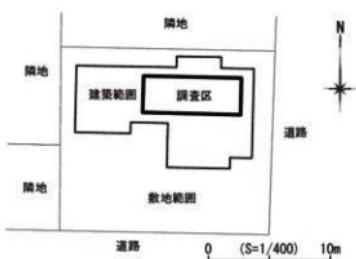
遺構の記録は、調査区平面図および調査区南壁断面図($S=1/20$)を作製し、記録写真的撮影はデジタルカメラを用いて行った。記録作業終了後、重機により埋戻しを行い調査を終了した。

3. 基本層序

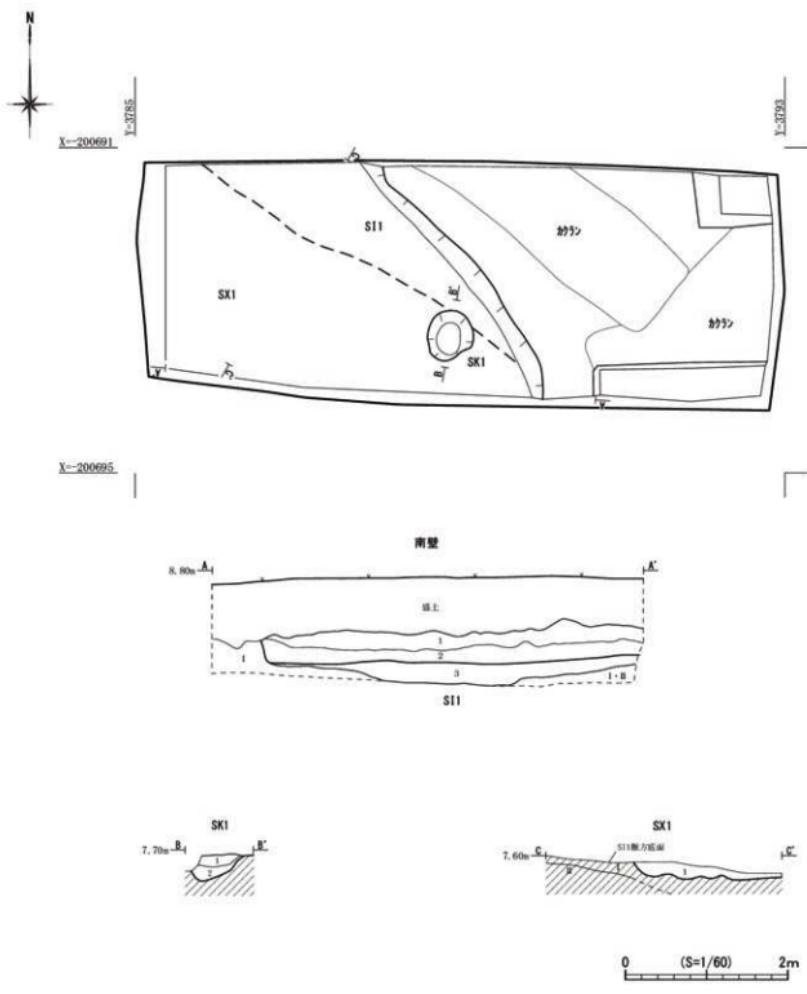
今回の調査では、層厚約0.3～0.4mの盛土の下に基本層を2層確認した。遺構検出面であるⅠ層上面までの深さは約0.5mである。

I 層：10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト。層厚は約30cmである。

II 層：10YR4/4褐色砂質シルト。層厚は30cm以上である。



第22図 第3次調査区配置図



第23図 第3次調査区平面・断面図

第2節 第3次調査

4. 発見遺構と出土遺物

調査では竪穴遺構1基、性格不明遺構1基が検出された。遺物は主に土師器、須恵器などが出土した。

(1) 竪穴遺構

S11 竪穴遺構（第23図）

【位置】調査区の中央～西半部で検出された。

【規模・形態】カマドや柱穴など、竪穴住居跡に伴う施設が確認されていないことから竪穴遺構とした。部分的な検出であるため規模は不明であるが、平面形状は方形を呈するものと推測される。規模は東西約3.7m以上、南北約2.7m以上である。

【堆積土】2層確認された。どの層も色調は基本層と類似するが、比較的粘性があり炭化物粒が混入する。

【壁面】ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は調査区南壁で最大30cmである。

【床面】掘方埋土上面を床面としている。貼床などは確認されなかつた。

【施設】東側で土坑（SI1-SK1）が検出された。直径約60cmで、深さ30cmである。

【出土遺物】竪穴遺構および土坑の堆積土内から弥生土器1点、非ロクロ土師器605点、須恵器1点、礫石器10点、石製品2点が出土した。そのうち弥生土器1点、非ロクロ土師器17点、須恵器1点、石器4点、石製品1点を掲載した。

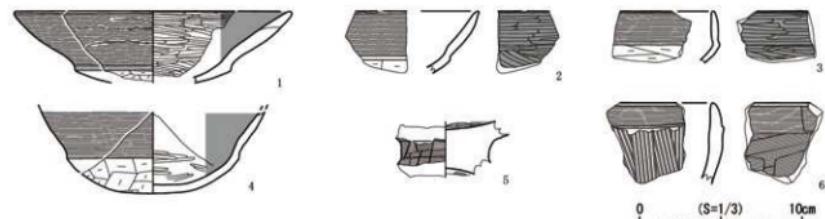
(2) 性格不明遺構

SX1 性格不明遺構（第23図）

S11 竪穴遺構掘方底面で検出された。規模は東西4.0m以上、南北2.5m以上で、深さは約20cmである。壁面は垂直気味に立ち上がる。調査の掘削深度の制限から、サブトレーナーの掘削のみで全掘削はしていない。S11 竪穴遺構より古い時期の竪穴住居跡である可能性も考えられるが、詳細は不明である。遺物は出土していない。

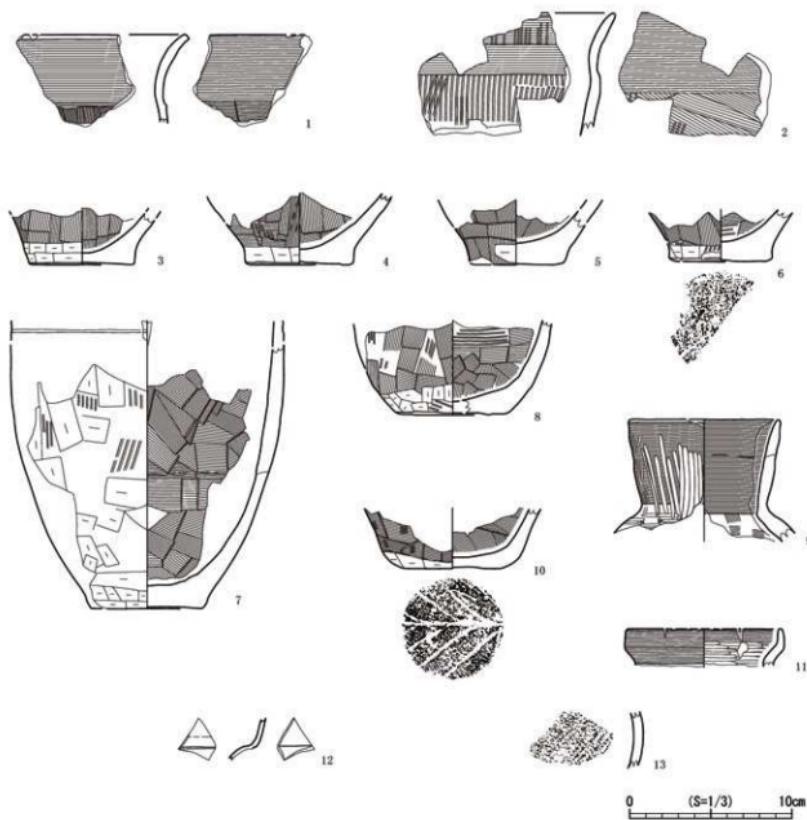
(3) 遺構外出土遺物

遺構外から非ロクロ土師器64点、陶器1点、土製品1点、金属製品1点が出土しており、その中から土製品1点を掲載した。



図版 番号	登録 番号	出土 遺構	層位	種別	器種	重量 (cm)			外観	内観	備考	写真 図版
						口径	底径	高さ				
1	C-3	S11	堆積土	土師器	坪	(16.8)	—	(4.4)	口～底上：ヨコナデ（横土ぬれあり）体下～底：ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	粘土織密	B-1
2	C-2	S11	堆積土	土師器	坪	—	—	(3.9)	口～底：ヨコナデ 備～底：ヘラケズリ	ヘラミガキ 黑色処理	粘土織密	B-2
3	C-1	S11	堆積土	土師器	坪	—	—	(3.2)	口：ヨコナデ 底～ヘラケズリ	ヘラミガキ 黑色処理	粘土織密	B-3
4	C-4	S11	堆積土	土師器	坪	—	—	(5.0)	口～底：ヨコナデ 底下～底：ヘラケズリ	ヘラミガキ 黑色処理	粘土織密	B-4
5	C-5	S11	堆積土	土師器	高坪	—	—	(3.4)	体～支脚：ヘラナデ	底部：ヘラミガキ 黒色処理	粘土織密 破壊含む	B-5
6	C-12	S11	堆積土	土師器	坪	—	—	(5.0)	口：ヨコナデ 体：ハケメ	ヨコナデ	粘土織密 破壊含む	B-6

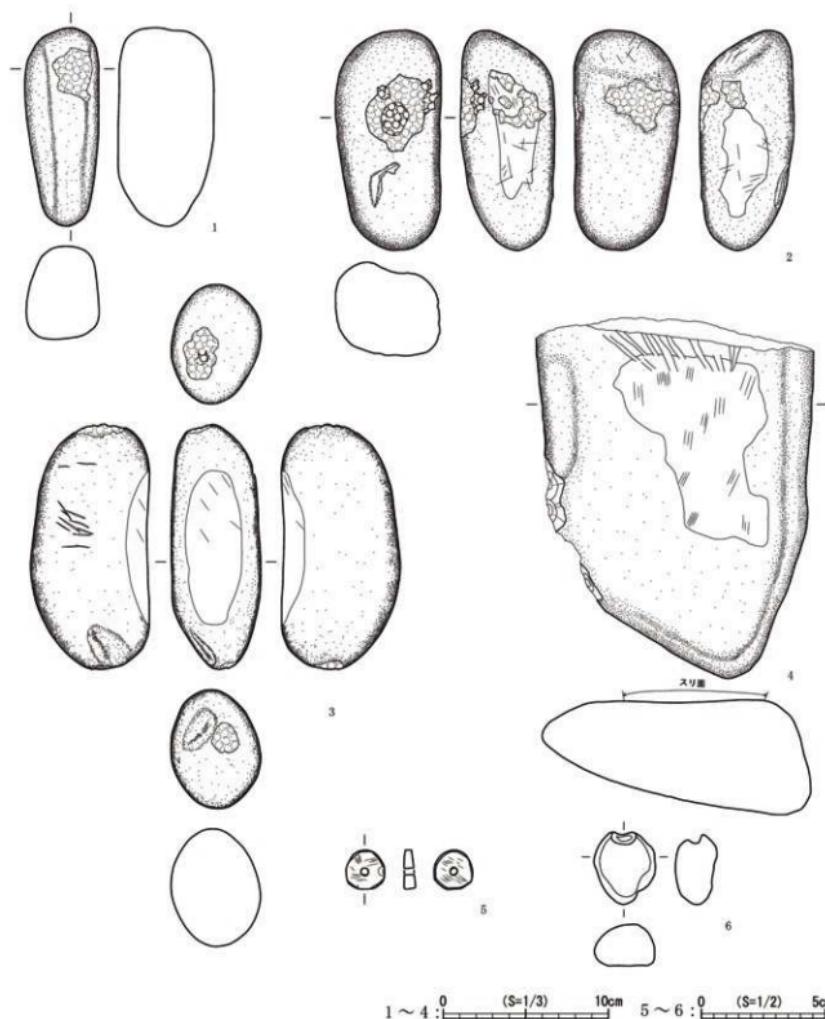
第24図 第3次調査出土遺物（1）



圖版 番号	登錄 番号	出土 遺構	層位	種別	基盤	法量 (cm)		外観	内観	備考	写真 図版	
						口径	底径					
1	C-15	SII	I	土師器	甕	-	-	(5.5)	口：ヨコナヂ 体上部：ハケメ ハラナヂ	粘土礫窓 砂を少量含む	B-7	
2	C-17	SII	堆積土	土師器	甕	-	-	(7.5)	口：ハケメ→ヨコナヂ 体：ハ ラナヂ→ハラナヂ	口：ヨコナヂ 体：ハ ラナヂ 砂粒含む	B-8	
3	C-11	SII	堆積土	土師器	甕	-	6.4	(3.6)	ハラナヂ 甕：ハケメ→ハラナヂ	ハラナヂ	B-9	
4	C-13	SII	堆積土	土師器	甕	-	(6.6)	(4.0)	体：ハケメ→ハラナヂ 体下半：ハラタ ヌリ 甕：木葉灰	ハラナヂ	B-10	
5	C-10	SII	解釈上	土師器	甕	-	5.8	(4.0)	口：ハラナヂ 甕：ハラナヂ	ハラナヂ	B-11	
6	C-14	SII	堆積土	土師器	甕	-	(6.0)	(3.2)	体：ハケメ→ハラナヂ 体下：ハケメ→ ハラナヂ	ハラメ→ハラナヂ	B-12	
7	C-16	SII	堆積土	土師器	甕	-	(6.9)	(17.7)	口：ヨコナヂ 体：ハケメ→ハラナヂ	ハラナヂ	B-13	
8	C-9	SII	堆積土	土師器	甕	-	(7.0)	5.8	ハケメ→ハラナヂ 体下：ハケメ→ハラタ ヌリ	ハラメ→ハラナヂ	B-14	
9	C-6	SII	堆積土	土師器	甕	(9.2)	-	(7.0)	口：ヨコナヂ→ハラタヌキ 体：ハケメ →ハラタヌキ	粘土礫窓 砂粒少量化	9-1	
10	C-8	SII	堆積土	土師器	甕?	-	6.2	(3.8)	体：ハケメ→ハラナヂ 体下半：ハラタ ヌリ 底：木葉灰	ハラナヂ	B-2	
11	C-7	SII	堆積土	土師器	甕	(9.0)	-	(2.6)	口：ヨコナヂ	口：ヨコナヂ→ハラタ ヌキ	9-3	
12	E-1	SII	堆積土	須恵器	不明	-	-	(2.0)	ロクロナヂ	ロクロナヂ	9-4	
13	B-1	SII	堆積土	須生土器	甕	-	-	(3.6)	破壊又(剥)	ハラナヂ	粘土礫窓	9-5

第25図 第3次調査出土遺物(2)

第2節 第3次調査



図版 番号	登録 番号	出土 遺構	層位	種別	基準	法量(cm)			写真 回数	
						長さ	幅	厚さ		
1	K-3	SII	堆積土	礫石器	礫石	12.0	4.5	5.8	405g	9-6
2	K-2	SII	堆積土	礫石器	礫石	13.3	6.3	5.3	775g	9-7
3	K-4	SII	堆積土	礫石器	磨石	14.8	5.3	7.2	880g	9-8
4	K-1	SII	堆積土	礫石器	磨石	21.8	16.9	6.9	3380g	9-9
5	K-5	SII	堆積土	石製品 (石製玉類)	平玉	1.6	1.55	4.55	1.5g	9-10
6	P-1	1375	-	土器底	不明	2.9	2.5	1.6	上部穿孔1ヵ所 磨拭後剥突	9-11

第26図 第3次調査出土遺物（3）

5.まとめ

今回の調査地点は栗遺跡のほぼ中央に位置する。第1・2次調査では遺跡範囲の北側を中心に堅穴住居跡が計41軒確認されており、今回の調査区はその集落跡の中心から南側に位置している。

調査の結果、堅穴造構1基と付属する土坑1基、性格不明遺構1基が検出された。遺物は堅穴造構を中心に土師器甕、壺、坏、高坏が出土した。また、須恵器長頸壺の口縁部～頸部にかけての有段部と考えられるものが1点、石製品の平玉、礫石器の磨擦器類が出土した。中には第25図9のような古墳時代後期中葉頃と考えられる栗園式より古い時期の長頸壺も出土したが、多くの土師器は栗園式の範疇に収まると推定される。特に出土した坏は下半部が括れて段がつき、口縁部にかけて外反する栗園式の特徴を有する。時期は第2次調査時の時期分類におけるII～IIIa期（7世紀前半～中頃）と考えられる。

引用・参考文献

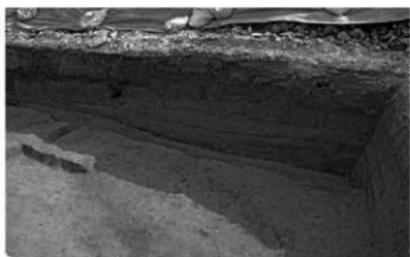
- 宮城県教育委員会 2009『市川橋遺跡の調査』宮城県文化財調査報告書第218集
 仙台市教育委員会ほか 1979『仙台市中田町栗遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第14集
 仙台市教育委員会 1982『栗遺跡』仙台市文化財調査報告書第43集
 仙台市教育委員会 2007『長町駅東遺跡第4次調査』仙台市文化財調査報告書第315集
 仙台市教育委員会 2012『鴻ノ巣遺跡 第9次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第400集
 東北学院大学文学部 2007『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』
 中村 浩 1995『須恵器集成図録 第1巻 近畿編I』雄山閣出版株式会社



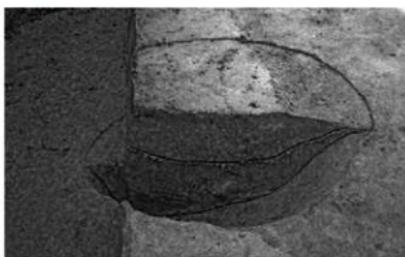
1. 調査区東半部検出及び完掘全景（東から）



2. 調査区北壁基本層断面（南から）

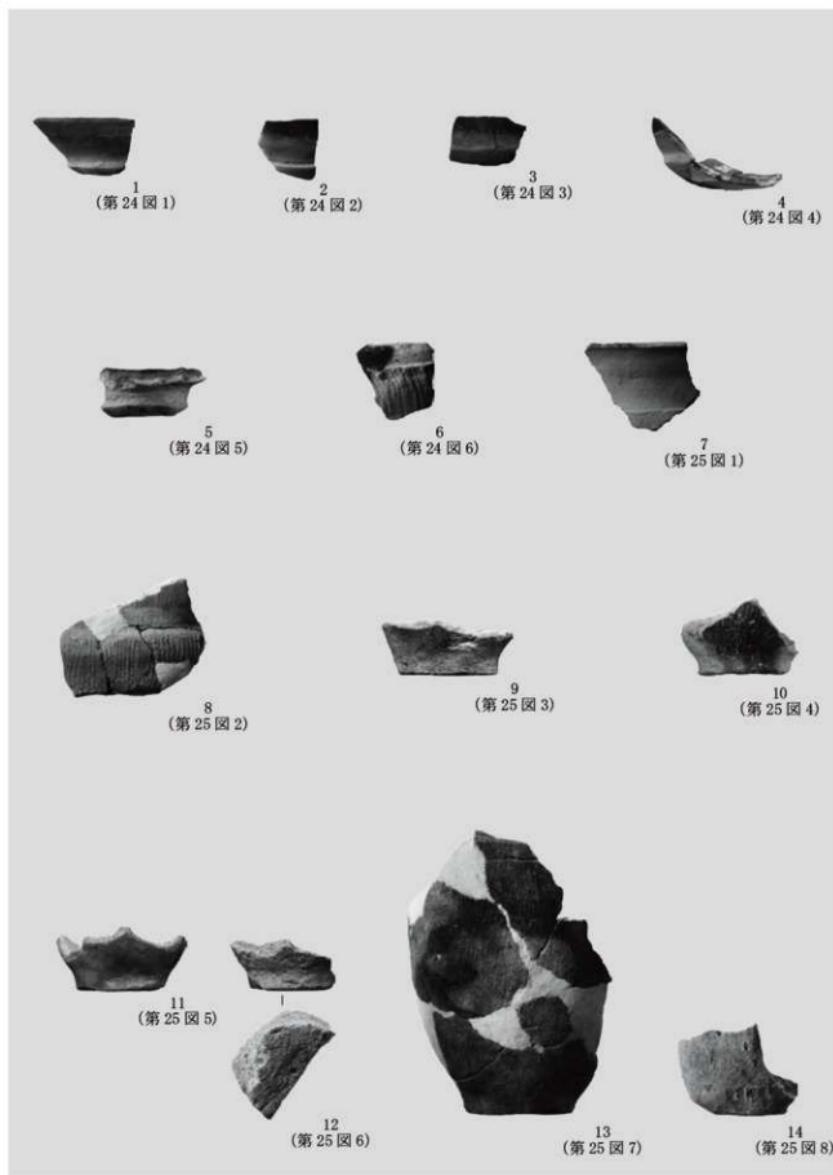


3. SI1 堅穴造構土層断面（北西から）



4. SI1-SK1 土層断面（東から）

写真図版7 栗遺跡第3次調査



写真図版 8 果遺跡第3次調査出土遺物（1）



写真図版 9 栗遺跡第3次調査出土遺物（2）

第5章 北目城跡の調査

第1節 遺跡の概要

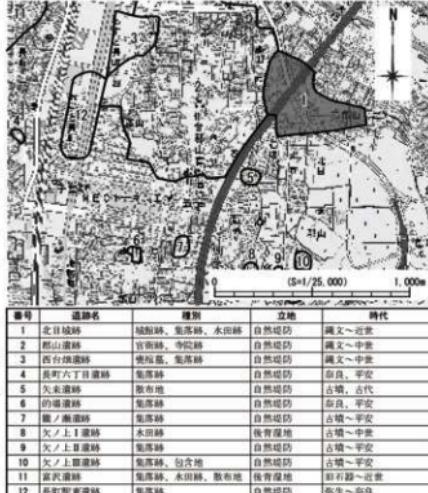
北目城跡は仙台市太白区郡山四丁目、郡山字北目宅地、東郡山二丁目にかけて所在する平城跡である。郡山低地の東側、広瀬川の右岸の標高約9～12mの自然堤防上に立地し、遺跡の範囲は東西約500m、南北約450mにおよぶ。現在、遺跡の中央部分は国道4号線仙台バイパスと仙台南部道路の長町インターチェンジから通じる都市計画道路の交差点となっている。

北目城は延宝年間（1670年代）に記された「仙台領古城書上」によると、城主は16世紀後半までは栗野氏とされる。栗野氏は永禄年間以降（1570年～）に伊達氏の臣家化したものと考えられており、「北目給衆」と呼ばれる伊達氏の臣家たちが栗野領に派遣されている。また、城跡は東西四十六間（約83m）、南北五十六間（約101m）の規模で四方に幅8間（約15m）の堀があったと記されているが、これまでの調査成果やかつての地籍図から見るに、城の痕跡はさらに広域に広がっていると推定され、これは主郭部分についてのみ記していたと考えられる。その後、慶長5（1600）年の関ヶ原の戦いの際には、伊達政宗はこの北目城に入り、ここを拠点として会津の上杉景勝方と対峙した。政宗は翌年には仙台城に居を移し、北目城に在住していた臣家たちも仙台城下に移封され、城は廢城となる。仙台城下にも「北目」という地名があるのはそのためである。昭和40年代以前までは土塁や堀の痕跡が田畠の区割りなどに残されており、その周囲の字名には「館ノ内」、「出丸」、「矢来」、「矢口」といった城館に関連する地名が残っていた。

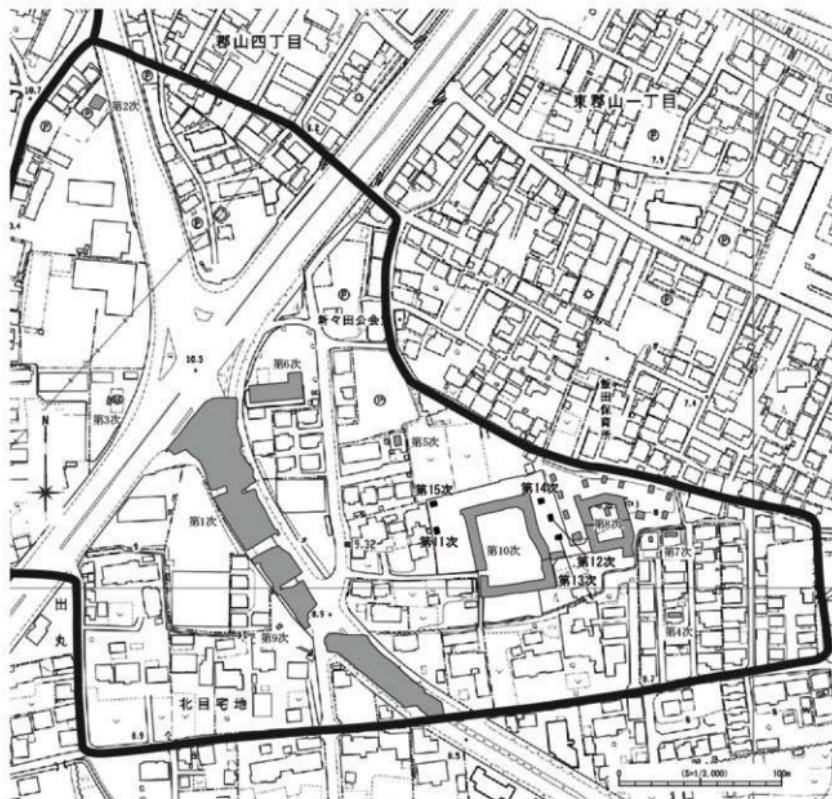
1992～93年にかけて行われた第1次調査では堀跡や井戸跡などが検出された。堀跡は南北もしくは東西方方向に鉤形に屈曲して巡る大規模なもので、底面には地山を掘り残して造り出された障壁が縦横に配置されており、複雑な構造を有する防御性に力点を置いた遺構と理解される（仙台市教育委員会1995b）。堀跡からは16世紀後半から19世紀にかけての陶磁器、刀、木製品、石製品など多彩な遺物が出土しており、堀跡は近世初期には削開され、場所によっては19世紀から近現代に至るまで埋没せず廻地として残っていたことが判明している。その後も宅地造成等の開発に伴い調査が行われ、障壁を伴う堀跡、井戸跡、土坑などが検出され、陶磁器や石製品などが出土している。

また、近世の城館跡に関わる遺構、遺物の他にも绳文時代後期の竪穴住居跡や後期～晚期にかけての遺物包含層、弥生時代の水田跡や中期から後期にかけての遺物、古代の溝跡、弥生時代頃と推定される墳砂痕などが確認されている。

遺跡の西側には、飛鳥時代から奈良時代にかけての陸奥国府である郡山遺跡が所在し、さらに長町駅東遺跡や西台畠遺跡といった郡山遺跡と関わる大規模な集落跡が広がっている。東側の広瀬川の対岸には同じく栗野氏の一族が居住していたと記録が残る沖野城跡が所在している。また、周囲には14世紀前葉の板碑が多数存在する。



第27図 北目城跡と周辺の遺跡

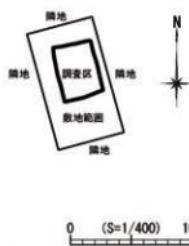


第28図 第11次～15次調査区位置図

第2節 第11次調査

1. 調査要項

- 遺跡名 北目城跡 (01029)
 調査地点 仙台市太白区東郡山二丁目 539番16
 調査期間 令和3年11月1日～11月8日
 調査対象面積 53.97 m²
 調査面積 12.0 m² (4.0m × 3.0m)
 調査原因 個人住宅の建築工事
 調査主体 仙台市教育委員会
 調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
 担当職員 主査 菅原翔太 主事 澤田雄大



第29図 第11次調査区配置図

第2節 第11次調査

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、令和3年9月13日付で申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和3年9月16日付R3教生文第108-245号で通知）に基づき実施した。

建築範囲内の北側に、東西3.0m×南北4.0mの調査区を設定し調査を行った。重機により盛土およびI a～d層を除去し、第10次調査時の遺構確認面であるGL-0.6～0.9mで遺構確認を行った。しかし判然としなかったためGL-1.1mまで掘削し、基本層IV層上面で遺構検出作業を行った。

遺構の記録は、調査区平面図および断面図(S=1/20)を作製し、記録写真的撮影はデジタルカメラを用いて行った。記録作業終了後、重機により埋め戻しを行い調査を終了した。

3. 基本層序

今回の調査では、盛土（層厚約0.3～0.4m）の下に、基本層を大別で6層、細別で9層確認した。遺構検出作業を行ったIV層上面までの深さは約1.1mである。

I a層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト。炭化物粒を微量に含む。盛土以前の畑耕作土と考えられる。層厚は約10～20cmである。

I b層：2.5Y3/2 黒褐色シルト。盛土以前の畑耕作土と考えられる。層厚は約5～12cmである。

I c層：10YR4/2 灰黄褐色シルト。炭化物粒・焼土粒を微量に含む。層厚は約23～27cmである。

I d層：10YR4/1 暗灰色粘土質シルト。にぶい黄橙色粘土ブロック・黒色粘土を層状に含む。層厚は約29～42cmである。

II 層：2.5Y3/2 黑褐色粘土。酸化鉄を斑状に含む。層厚は約19～26cmである。

III 層：10YR4/1 暗灰色粘土。酸化鉄を斑状に含む。層厚は約7～9cmである。

IV 層：2.5Y4/1 黄灰色粘土。酸化鉄を斑状に含む。層厚は約11～14cmである。

V 層：10YR3/1 黑褐色粘土。酸化鉄を斑状に含む。層厚は約8～10cmである。

VI 層：10YR5/2 灰黄褐色粘土。酸化鉄を斑状に含む。層厚は10cm以上である。

4. 発見遺構と出土遺物

調査では、基本層IV層上面で堀跡1条・溝跡4条とピット4基が検出された。遺物は出土していない。

(1) 堀跡

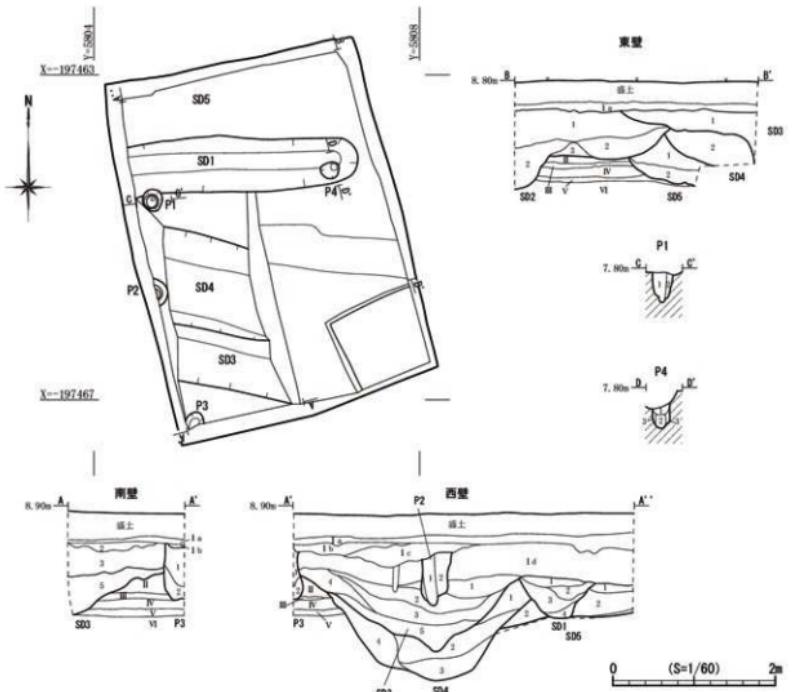
SD5 堀跡（第30図）

調査区の北半部に位置する。東南～北西方向の溝跡である。両端は調査区外へ延びる。SD1～4溝跡、P1・4より古い。検出長は約3.4m、上端幅約1.5m以上、下端幅約0.6m以上、掘り込み面からの深さは約0.4～0.5mである。堆積土は3層で、灰黄褐色粘土を主体としている。

(2) 溝跡

SD1 溝跡（第30図）

調査区の北半部に位置する。東西方向の溝跡である。西端は調査区外へ延びる。SD4溝跡、SD5堀跡、P4より新しく、SD3溝跡、P1より古い。検出長は約2.8m、上端幅0.6～0.7m、下端幅約0.2m、掘り込み面からの深さは約0.5mである。堆積土は4層で、黒褐色ないし暗灰色粘土を主体としている。



透様名	部位	色調	土質	備考・斑入り
P1	1	10V3/1 黒褐色	シルト	サリーブ褐色シルトブロックを少量、炭化物粒を微量含む。
	2	10V3/2 黒褐色	シルト	炭化物粒を多量、オーブル褐色シルト小ブロックを微量含む。
P2	1	10V3/1 黑褐色	シルト	炭化物粒、砂土粒を少量、細砂を少量含む。
	2	2.5V4/1 黄褐色	シルト	細砂を多量、炭化物粒を少量、にが(黄褐色シルトを少量含む。
P3	1	10V3/1 黑褐色	粘土質シルト	にが(黄褐色シルトブロックを多量含む)。
	2	10V6/7.7/1 黑色	粘土	炭化物粒、砂土粒を多量、にが(黄褐色粘土ブロックを多量含む。
	3	2.5V3/2 黑褐色	粘土質シルト	にが(黄褐色シルトブロックを少量含む。
P4	1	2.5V3/1 黑褐色	粘土質シルト	にが(黄褐色シルトブロックを少量含む。
	2	2.5V3/2 黑褐色	粘土質シルト	—
	3	10V3/2 黑褐色	粘土質シルト	にが(黄褐色シルトブロックを少量含む。
SD1	1	10V3/1 黑褐色	粘土質シルト	黑色粘土を多量、にが(黄褐色粘土ブロックを微量含む。
	2	10V3/1 黑褐色	粘土	炭化物粒、にが(黄褐色粘土ブロックを少量含む。
	3	10V3/1 棕褐色	粘土	炭化物粒を多量、にが(黄褐色粘土ブロックを多量含む。
	4	10V3/2 灰黃褐色	粘土	灰黒色粘土を互層状に含む。
SD2	1	10V3/1 棕褐色	粘土質シルト	にが(黄褐色粘土ブロックを少量含む。
	2	2.5V4/1 黄褐色	粘土	灰黃褐色粘土ブロックを多量、酸化鉄を斑状に含む。
	3	10V3/1 棕褐色	粘土	にが(黄褐色粘土ブロックを少量含む。
SD3	1	10V3/4 にが(黄褐色	粘土	黑褐色粘土ブロックとの混合土。
	2	2.5V3/1 黑褐色	粘土	にが(黄褐色粘土ブロックを多量含む。
	3	2.5V4/1 黄褐色	粘土	にが(黄褐色粘土ブロックを少量含む。
	4	10V3/2 灰黃褐色	粘土	炭化物粒を斑状に含む。
	5	2.5V3/1 黑褐色	粘土	植物遺体を多量、炭化物粒を少量、炭化鉄を斑状に含む。
SD4	1	10V3/2 灰黃褐色	粘土	炭化物を斑状に含む。
	2	2.5V4/1 黄褐色	粘土	基本的には砂土を多量に含む。
	3	5V3/1 オリーブ色	粘土	灰黒色粘土・にが(黄褐色粘土をリナ状ないし瓦層状に含む。
	4	10V3/2 灰黃褐色	粘土	VII層 土ブロックを層下部に少量、炭化物粒を微量、炭化鉄を斑状に含む。
SD5	1	10V3/1 黑褐色	粘土	炭化物粒を多量、酸化鉄を斑状に含む。
	2	10V3/2 灰黃褐色	粘土	灰黒色粘土とリナ状ないし瓦層状に含む。

第30図 第11次調査区平面・断面図

第2節 第11次調査

SD2 溝跡（第30図）

調査区の北端で検出された。東西方向の溝跡である。両端は調査区外へ延びる。SD5 堀跡より新しく、SD3 溝跡より古い。検出長は約 2.6m、上端幅約 0.3m 以上、下端幅約 0.2m 以上、掘り込み面からの深さは約 0.5m である。堆積土は 3 層で、褐灰色粘土質シルトを主体としている。

SD3 溝跡（第30図）

調査区の南半部で検出された。東南～北西方方向の溝跡である。両端は調査区外へ延びる。SD1・4 溝跡、SD5 堀跡より新しく、P2・3 より古い。検出長は約 3.3m、上端幅約 1.5m、下端幅約 0.9m、掘り込み面からの深さは約 0.7 ~ 0.9m である。堆積土は 5 層で、黒褐色ないし灰黄褐色粘土を主体としている。

SD4 溝跡（第30図）

調査区の南半部で検出された。東南～北西方方向の溝跡である。両端は調査区外へ延びる。SD5 堀跡より新しく、SD1・4 溝跡より古い。検出長は約 3.3m、上端幅 2.3m 以上、下端幅約 1.1m、掘り込み面からの深さは約 1.2m である。堆積土は 4 層で、灰黄褐色粘土を主体としている。

(3) ピット

P1 ~ 4 (第30図)

調査区西壁にかかる P2・3 は I d 層上面から掘り込まれているため、溝跡より新しい。ピットの径は約 22 ~ 34 cm、深さは最大で約 70 cm である。P1・2 は柱痕跡があり、径 15 ~ 18 cm である。堆積土は 2 ~ 3 層で黒褐色シルトを主体としている。部分的にぶい黄褐色シルトブロックを含む。

5. まとめ

今回の調査地点は、北目城跡範囲内の東側に位置する。周辺では、令和2年度に宅地造成区画の道路部分を対象に第10次調査を行っており、掘立柱建物跡 1 棟、堀跡 3 条、溝跡 10 条、井戸跡 6 基、土坑 10 基、ピット 116 基が確認されている。今回の調査では堀跡 1 条・溝跡 4 条、ピット 4 基が確認された。その中で、堆積状況や位置関係から、SD3 溝跡は第10次調査の SD2a 溝跡に、SD4 溝跡は第10次調査の溝跡 SD2b 溝跡に、SD5 堀跡は第10次調査の SD10 堀跡にそれぞれ対応すると想定される。



1. SD3・4 溝跡土層断面（東から）



2. 調査区完掘全景（東から）

写真図版 10 北目城跡第11次調査

第3節 第12次調査

1. 調査要項

遺跡名	北目城跡 (01029)
調査地点	仙台市太白区東郡山二丁目 539番7・822番
調査期間	令和3年11月15日～17日
調査対象面積	54.79 m ²
調査面積	12.0 m ² (4.0m × 3.0m)
調査原因	個人住宅の建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	主査 菅原翔太 主事 澤田雄大



第31図 第12次調査区配図

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、令和3年9月13日付で申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(令和3年9月16日付R3教文生第108-246号で通知)に基づき実施した。

建築範囲内の中央に、東西3.0m ×南北4.0mの調査区を設定し調査を行った。重機により盛土およびこれ以前の畑耕作土層を除去し、GL-0.7mまで掘削を行いⅢ層上面で遺構検出作業を行った。

遺構の記録は、調査区平面図および断面図 (S=1/20) を作製し、記録写真の撮影はデジタルカメラを用いて行った。記録作業終了後、重機により埋め戻しを行い調査を終了した。

3. 基本層序

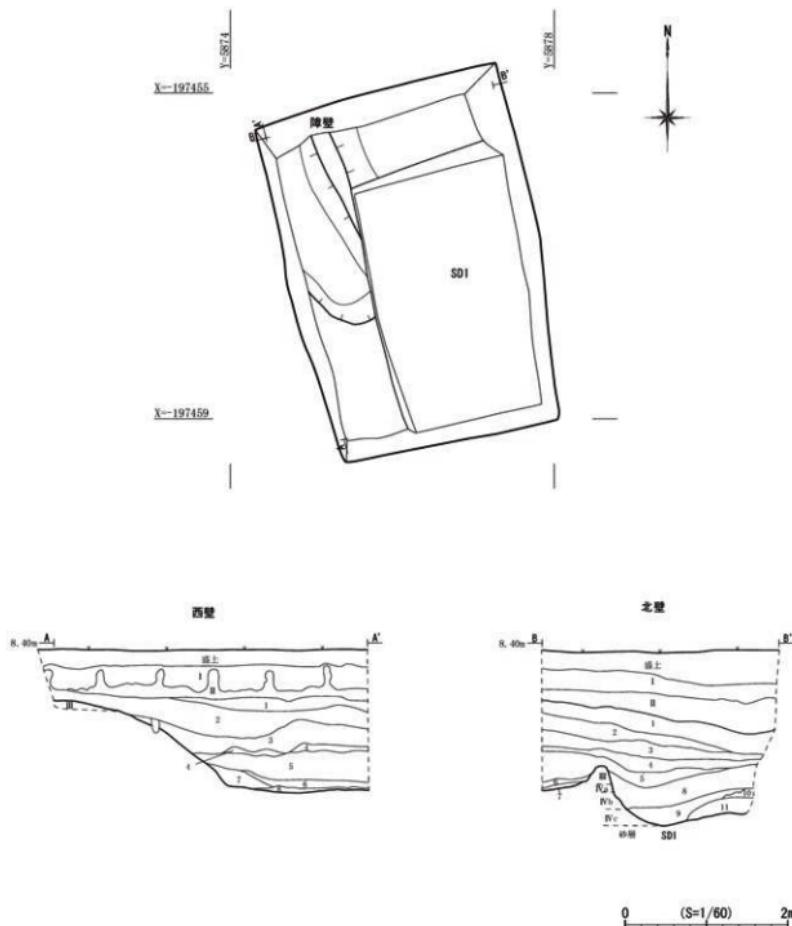
今回の調査では、層厚約0.2mの盛土の下に基本層を大別で7層確認した。各層は北側の第14次調査区で記録した基本層序に準拠している。遺構検出面であるⅢ層上面までの深さは約0.8mである。

- I 層 : 10YR4/4 褐色シルト。炭化物粒・焼土粒を微量、下層にⅡ層シルトブロックを多量に含む。盛土以前の畑耕作で行われた天地返しと考えられる。層厚は約30cmである。
- II 層 : 10YR4/2 灰黄褐色シルト。炭化物粒・焼土粒を少量、にぶい黄褐色シルト小ブロックを少量含む。盛土以前の畑耕作土と考えられる。第14次調査区のI層に対応する。層厚は8～38cmである。
- III 層 : 10YR4/1 暗灰色粘土質シルト。酸化鉄を斑状に含む。第14次調査区のII層に対応する。層厚は約40cmである。
- IV a層 : 10YR4/1 暗灰色粘土。にぶい黄褐色粘土を互層状に含む。第14次調査区のVI層に対応する。層厚は約50cmである。
- IV b層 : 10YR5/1 暗灰色粘土。第14次調査区のVI層の細分層である。
- IV c層 : 10YR3/1 黒褐色粘土。第14次調査区のVI層の細分層である。

4. 発見遺構と出土遺物

調査では、堀跡が1条検出された。遺物は須恵器が1点出土した。

第3節 第12次調査



透標名	部位	色調	土質	備考・記入物
SDI	1. 2. 3/2 黒褐色	粘土質シルト	炭化物鉱、堆土粒を多量、灰黒褐色シルト・小ブロックを少量含む。	
	2. 10W4/1 暗灰色	粘土質シルト	炭化物鉱を多量、堆土粒を少量、灰黒褐色、黒色粘土を層状ないしラミナ状に含む。	
	3. 2. 3/4 黄褐色	粘土質シルト	炭化物鉱、堆土粒を微量、に点々黄褐色シルトブロックを少量含む。細泥鉱を層状に含む。	
	4. 10W3/1 黑褐色	粘土	黒褐色粘土をラミナ状に含む。	
	5. 10W4/1 暗灰色	粘土	に点々黄褐色粘土小ブロックを微細に含む。	
	6. S1V4/1 灰色	粘土	に点々黄褐色粘土をブロック状ないし層状に微細含む。	
	7. 2. 3/3/1 黑褐色	粘土	に点々黄褐色、黑色粘土をブロック状ないしラミナ状に含む。	
	8. S1Z3/1 オリーブ黒色	粘土	に点々黄褐色粘土ブロックを多量に含む。西壁	
	9. S1V4/1 灰色	粘土	黒褐色粘土上をフマク状に含む。東壁	
	10. 10W4/1 暗灰色	粘土	に点々黄褐色、黑色粘土小ブロックを少量含む。	
	11. 2. 3/2/1 黑褐色	粘土	黒褐色粘土を少量含む。	

第32図 第12次調査区平面・断面図

(1) 堀跡

SD1 堀跡 (第32図)

南北方向の堀跡と推定され、両端は調査区外へ延びる。調査区内の全てが遺構内部にかかる。検出長は4.0m以上、上端幅3.0m以上、下端幅1.4m以上、掘り込み面からの深さは約1.1～1.3mである。また、底面には基本層を一部掘り残して造り出された南北方向に延びる畦状の障壁が設けられている。堀跡と平行に配置され、上端幅25cm、下端幅約80cmで溝底からの高さは西側が約30cm、東側が約70cmであり障壁の底面から東西で約40cmの高低差がある。堆積土は11層で黒褐色ないし褐灰色粘土を主体としている。遺物は堆積土層から須恵器が1点出土した。



図版 番号	登録 番号	出土 遺構	層位	種別	墓種	法面 (cm)			外観	内面	備考	写真 図版
						口徑	底径	高さ				
1	E-1	SD1	上層	須恵器	高台付 甕	-	(8.0)	(2.9)	ロクロナゲ	ロクロナゲ		11-3

第33図 第12次調査出土遺物

5.まとめ

今回の調査地点は、北目城跡範囲内の東側に位置する。今回の調査では堀跡が1条検出された(SD1堀跡)。当初は、第10次調査の調査成果から東西方向のSD2a・b溝跡が確認できるように調査区を設定したが、今回の調査区内では確認されなかった。

SD1堀跡は第10次調査のSD1堀跡と直交する南北方向の堀跡である。南側に隣接する13次調査区で確認されたSD1堀跡と同様に、第10次-SD1堀跡から分岐した堀跡と推定される。その底面には、第10次調査同様に障壁が設けられていることが確認された。



1. 調査区北壁断面（南から）



2. 完掘状況（北から）

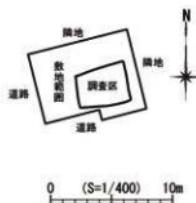
3
(第33図 1)

写真図版 11 北目城跡第12次調査・出土遺物

第4節 第13次調査

1. 調査要項

遺跡名	北目城跡 (01029)
調査地点	仙台市太白区東郡山二丁目 539 番6、823
調査期間	令和3年11月12日～18日
調査対象面積	59.59 m ²
調査面積	12.0 m ² (4.0m × 3.0m)
調査原因	個人住宅の建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	主査 菅原翔太 主事 澤田雄大



第34図 第13次調査区配置図

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、令和3年9月27日付で申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(令和3年9月30日付R3教生文第108-274号で通知)に基づき実施した。

建築範囲内の南東側に、東西4.0m×南北3.0mの調査区を設定し調査を行った。申請地の北側2ヶ所の宅地においてもほぼ同時期に申請を受けており、計3ヶ所の調査を同時に行つた。重機により盛土および搅乱された部分を除去し、I層下面で遺構検出作業を行つた。

遺構の記録は、調査区平面図および断面図(S=1/20)を作製し、記録写真的撮影はデジタルカメラを用いて行つた。記録作業終了後、重機により埋め戻しを行い調査を終了した。

3. 基本層序

今回の調査では、層厚約0.3mの盛土の下に基本層を2層確認した。各層は北側の第14次調査区で記録した基本層序に準拠している。遺構検出までの深さは約0.6mである。

- I 層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト。灰黄褐色シルトをラミナ状ないし互層状に含む。層厚は約15cmである。
- II 層：10YR6/2灰黄褐色砂質シルト。酸化鉄を斑状に含む。層厚は50cm以上である。

4. 発見遺構と出土遺物

調査では、堀跡1条が検出された。遺物は土師器1点、陶器3点が出土した。

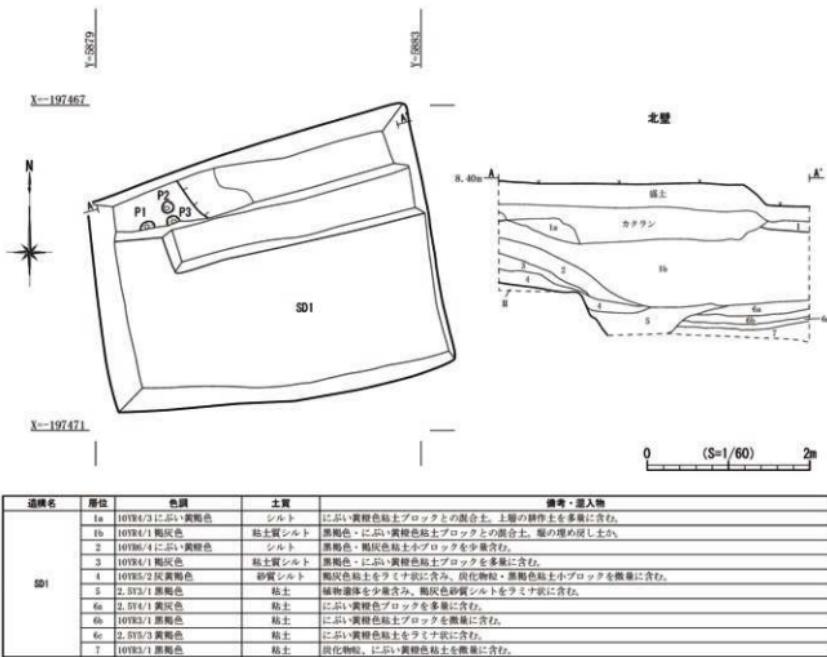
(1) 堀跡

SD1 堀跡（第35図）

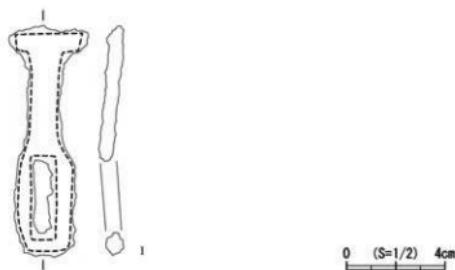
南北方向の堀跡と推定され、南北両端は調査区外へ延びる。調査区全てが遺構内部に位置する。検出長は3.0m以上、上端幅4.0m以上、下端幅2.5m以上、掘り込み面からの深さは約1.1～1.4m以上で、掘削深度の制限から底面までの掘削はしていない。堀跡の西壁側の底面は基本層を一部掘り残して造り出されたテラス状の段差が設けられている。規模は幅1.0m以上、テラス部から底面にかけての深さは約50cm以上である。テラス部分の平坦面には、径15～20cmのピットが3基確認された。堀跡の堆積土は大別で7層、細別で10層で黒褐色ないしにぶい黄橙色粘土を主体としている。遺物は1層から土師器片が1点出土した。

(2) その他の出土遺物

II層上面から陶器片が3点、鉄製品が1点出土した。このうち鉄製品を掲載した(第36図1)。



第35図 第13次調査区平面・断面図



第36図 第13次調査出土遺物

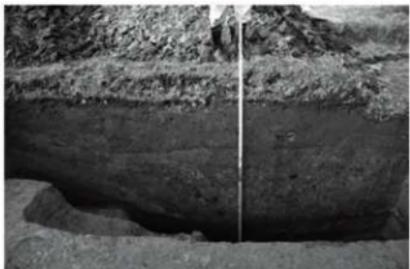
図版 登録 番号	登録 番号	出土 遺構	層位	種別	基準	法量(cm)			備考	写真 回数
						長さ	幅	厚さ		
1	X-1	II層	金属製品	不明	9.4	3.2	0.7	用途不明		12-5

5. まとめ

今回の調査地点は北目城跡範囲内の東側に位置する。今回の調査では、第10次調査の調査成果から調査区内で東西方向のSD2溝跡の北側の立ち上がりが確認されることが想定されていたが、別の南北方向の堀跡1条が検出された。規模や位置関係から、第10次調査のSD1堀跡から分岐した堀跡の可能性がある。なお、堀跡内部の西壁側には基本層を一部掘り残して造り出されたテラス状の段差が設けられており、第12次調査区で確認された障壁と同様の機能を有すると考えられる。



1. 遺構検出状況（北から）



2. SD1 堀跡土層断面（南から）



3. 調査区北壁断面（南から）



4. 調査区完掘状況（東から）



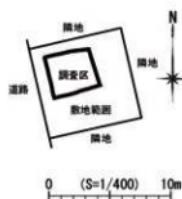
5
(第36図1)

写真図版12 北目城跡第13次調査・出土遺物

第5節 第14次調査

1. 調査要項

遺跡名	北目城跡 (01029)
調査地点	仙台市太白区東郡山二丁目 539番8、821
調査期間	令和3年11月8日～12日
調査対象面積	57.57 m ²
調査面積	12.0 m ² (4.0m × 3.0m)
調査原因	個人住宅の建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	主査 菅原翔太 主事 澤田雄大



第37図 第14次調査区配置図

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、令和3年9月27日付で申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(令和3年9月30日付R3教生文第108-275号で通知)に基づき実施した。

建築範囲内の南東側に、東西4.0m×南北3.0mの調査区を設定し調査を行った。申請地の南側2ヶ所の宅地においてもほぼ同時期に申請を受けており、計3ヶ所の調査を同時に行つた。重機により盛土および基本層I層を除去し、II層上面で遺構検出作業を行つた。

遺構の記録は、調査区平面図および断面図(S=1/20)を作製し、記録写真的撮影はデジタルカメラを用いて行つた。記録作業終了後、重機により埋め戻しを行い調査を終了した。

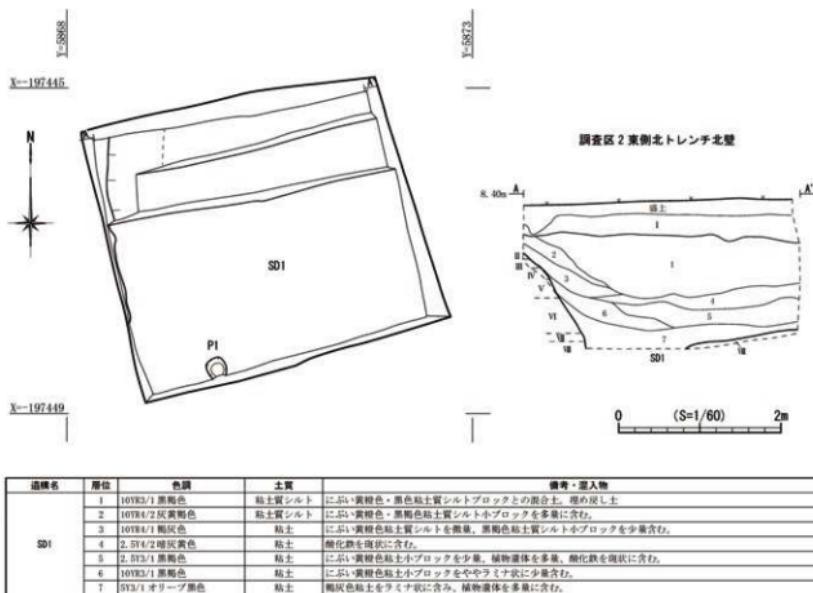
3. 基本層序

今回の調査では、盛土(層厚約0.2m)の下に基本層を8層確認した。遺構検出面であるII層上面までの深さは約0.6mである。

- I 層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト。炭化物粒・焼土粒・小礫を少量含む。盛土以前の畑耕作土層。層厚は約20～35cmである。
- II 層：10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト。酸化鉄を斑状に含む。層厚は約7cmである。
- III 層：10YR4/1褐灰色粘土質シルト。酸化鉄を斑状に含む。層厚は約10cmである。
- IV 層：10YR3/1黒褐色粘土。灰黄褐色粘土ブロックを多量に含む。層厚は約14～16cmである。
- V 層：10YR6/3にぶい黄橙色粘土。褐灰色粘土をブロック状ないし層状に少量含む。層厚は約22cmである。
- VI 層：10YR4/1褐灰色粘土。にぶい黄橙色粘土を互層状に含む。層厚は約50cmである。
- VII 層：10YR5/1褐灰色粘土。層厚は約6cmである。
- VIII 層：10YR6/2灰黄褐色粘土。層厚は9cm以上である。

4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では堀跡1条とピット1基が検出された。遺物は陶器が1点出土した。



第38図 第14次調査区平面・断面図

(1) 堀跡

SD1 堀跡（第38図）

南北方向の堀跡で、さらに調査区外へ延びる。調査区のほぼ全てが遺構内部に位置する。P1より古い。検出長は3.0m以上、上端幅3.7m以上、下端幅2.8m以上、掘り込み面からの深さは約1.4m以上である。堆積土は7層で褐色を主体としている。遺物は2層から陶器が1点出土した。

(2) ピット

P1（第38図）

堀跡堆積土1層上面で確認された。調査区南壁にかかる断面から径約25cm、深さは約35cmである。堆積土は1層で黒褐色シルトを主体とする。遺物は出土していない。

5.まとめ

今回の調査地点は北目城跡範囲内の東側に位置する。今回の調査ではSD1堀跡が1条確認され、調査区内の大半はこの堀跡の内部に位置する。調査区西側の一部で堀跡が立ち上がっているが、堀の幅は少なくとも約4.0m以上あると推定される。今回の調査区の南側で実施した第12・13次調査においても同様の規模と堆積状況をもつ堀跡が確認されていることから、最大で検出長30m以上を測る南北方向のSD1堀跡の存在が明らかとなった。この堀跡は、第10次調査のSD1堀跡がクランク状に屈曲する部分から北に分岐すると推定される。



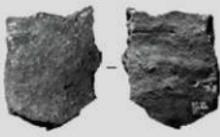
1. 遺構検出状況（東から）



2. 調査区北壁断面（南から）



3. 完掘全景（南から）



4

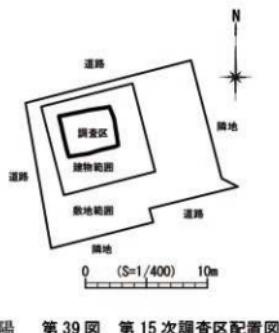
図版 番号	登録 番号	出土 遺構	部位	種別	基準	法量(cm)			外面	内面	備考	写真 回数
						口径	底径	高さ				
-	1c-1	S24	-	陶器	-	-	-	-	-	-	素滑?	13-4

写真図版 13 北目城跡第 14 次調査・出土遺物

第6節 第15次調査

1. 調査要項

遺跡名	北目城跡 (01029)
調査地点	仙台市太白区東郡山二丁目 539-14
調査期間	令和3年11月29日～12月2日
調査対象面積	57.57 m ²
調査面積	12.0 m ² (4.0m × 3.0m)
調査原因	個人住宅の建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	係長 及川謙作 主査 近藤勇亮 主事 早川太陽



2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、令和3年9月27日付で申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(令和3年9月30日付R3教生文第108-273号で通知)に基づき実施した。

調査では建築範囲内の北西側に、東西4.0m × 南北3.0mの調査区を設定し、東に隣接する宅地および南側の宅地においても同様の申請が出されたことから(R3教生文第108-276、277)、3か所を同時併行で調査を行った。重機により盛土および旧耕作土であるI～III層を除去後、基本層IV層上面で遺構検出作業を行った。

遺構の記録は、調査区平面図および断面図(S=1/20)を作製し、記録写真的撮影はデジタルカメラを用いて行った。記録作業終了後、重機により埋め戻しを行い調査を終了した。

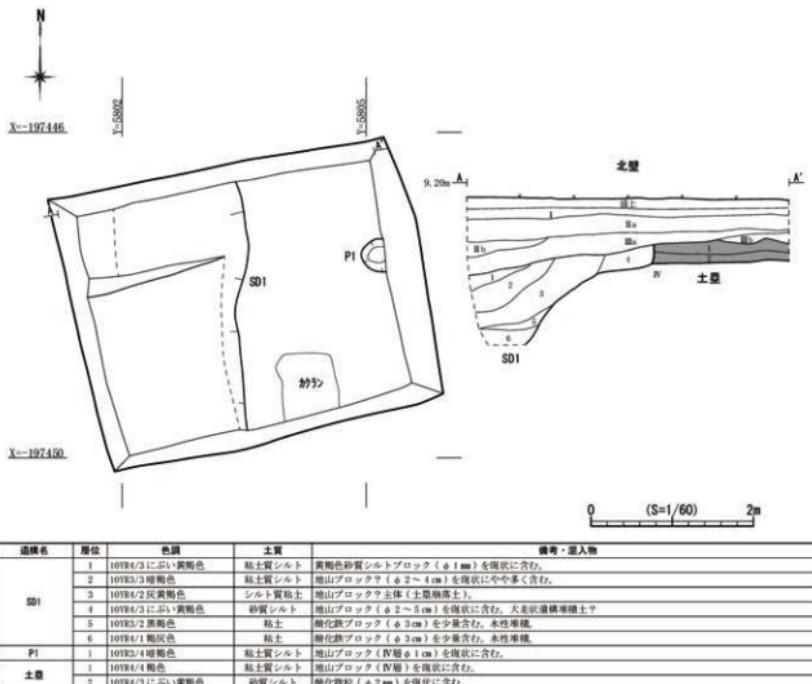
3. 基本層序

今回の調査では、碎石と盛土(層厚約0.2m)の下に基本層を大別で4層、細別で6層確認した。遺構検出面であるIV層上面までの深さは0.9mである。

- I 層 : 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。酸化鉄粒(φ 5mm)を斑状に含む。盛土以前の畑耕作土である。層厚は約20～26cmである。
- II a層 : 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。層厚は約20～24cmである。
- II b層 : 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。調査区北壁の一部分でのみ確認された。黄褐色砂質シルトブロック(φ 10～20mm)を少量含む。層厚は約2～20cmである。
- III a層 : 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。マンガン粒(φ 5mm)を斑状に含む。層厚は約4～26cmである。
- III b層 : 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。炭化物粒(φ 2mm)を少量含む。層厚は約4～16cmである。
- IV 層 : 10YR4/4 暗褐色粘土。酸化鉄粒(φ 5mm)を斑状に含む。今回の遺構検出面である。土星の可能性のある土層の下部で確認された。

4. 発見遺構と出土遺物

調査では堀跡1条とピット1基が検出された。遺物は出土していない。



第40図 第15次調査区平面・断面図

(1) 堀跡

SD1 堀跡（第40図）

調査区の西側で検出された。南北方向に掘り込まれた堀跡と推定される。南北両端は調査区外へ延びる。検出長は3.0m以上、上端幅2.3m以上、下端幅0.7m以上、検出面からの深さは約1.0m以上である。

堆積土は6層で、暗褐色を主体としている。このうち4層は堀の落ち際にやや方形に確認され、幅が約0.6mと小さいことから堀に伴う犬走り状遺構の堆積土である可能性がある。

(2) ピット

PI（第40図）

調査区東側で検出された。全体の約半分の確認にとどまっている。推定される直径は約40cmである。堆積土は1層で、暗褐色粘土質シルトを主体とする。

(3) 土壘

北壁断面において堀跡の落ち際に平坦な土層が2層確認された。地山プロックを斑状に含んでおり、遺構との位置関係と堆積状況から堀に伴う土壘構築土の一部の可能性がある。

第6節 第15次調査

5. まとめ

今回の調査地点は、北目城跡範囲内の東側に位置する。今回の調査では南北に延びる堀跡が1条検出された。東側の肩が検出されていないことから、少なくとも堀の幅は4.0m以上あるものと推定される。この堀跡は調査区南側の第11次調査では延長部分が検出されていないものの、第12～14次調査で確認された堀跡同様、現在の地境に沿うように存在していたものと推測される。

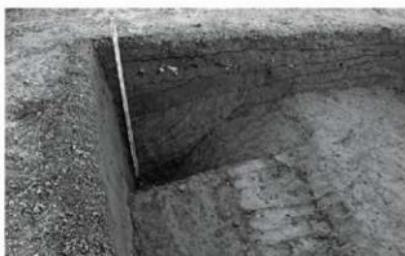
参考文献

仙台市教育委員会 1995『北目城跡』仙台市文化財調査報告書第197号

仙台市史編さん委員会 2006『仙台市史 特別編7 城館』



1. 遺構検出状況（南から）



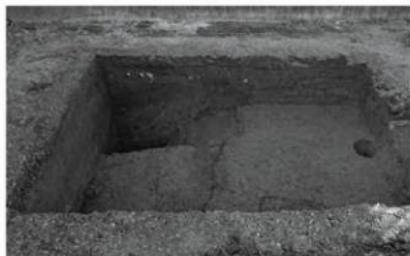
2. 調査区北壁土層断面（南から）



3. 遺構完掘状況（南東から）



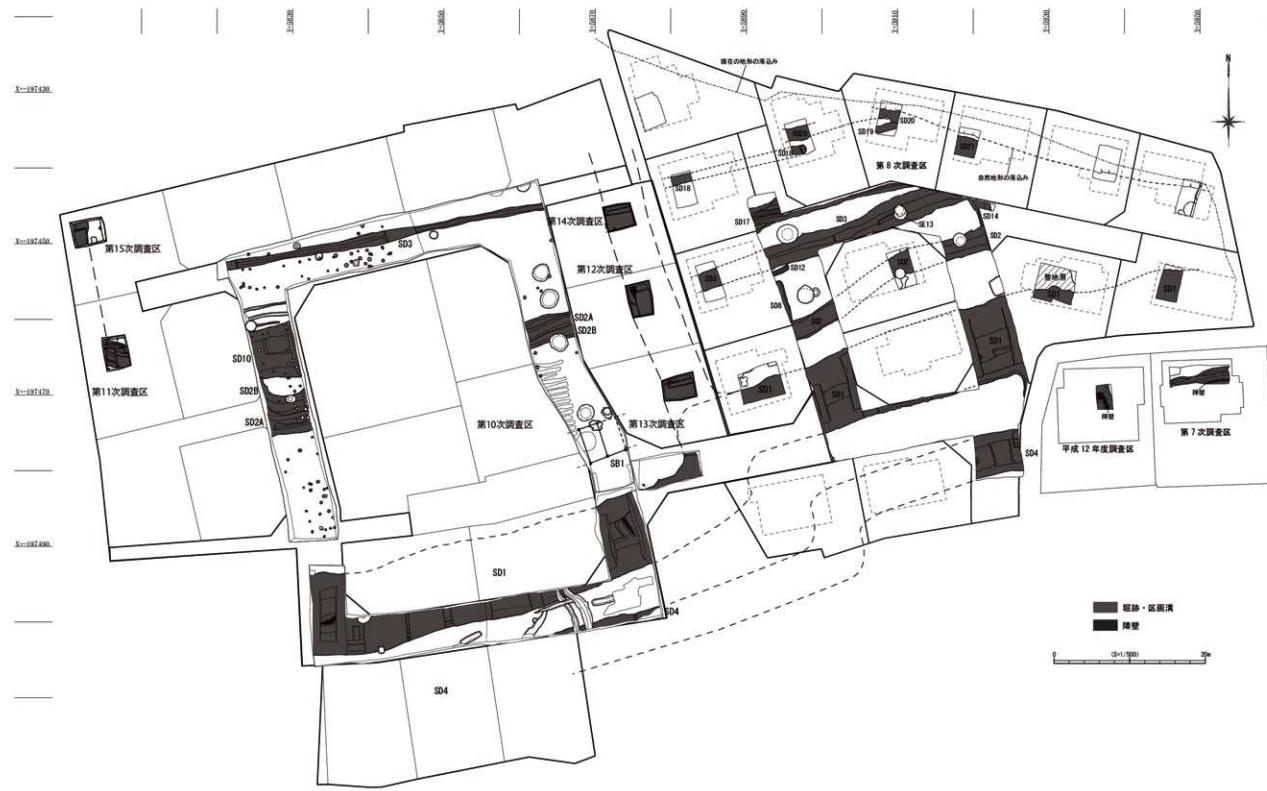
4. 遺構完掘状況（北から）



5. 調査区完掘状況（南から）



6. 作業状況（南東から）



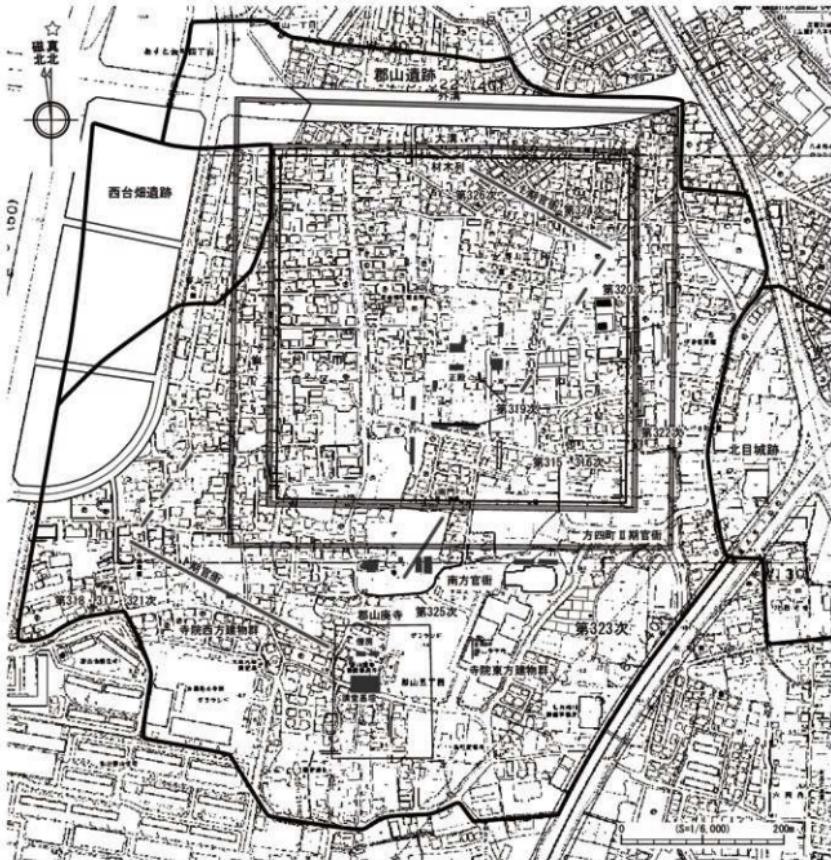
第41図 北目城跡第7・8・10～15次調査 堀跡配置図

第6章 郡山遺跡の調査

令和4年度に実施した発掘調査は、第42図の通りである。なお、国庫補助を受けた発掘調査の結果および抄録は、仙台市文化財調査報告書第507集『郡山遺跡43』に所収している。

表4 令和4年度発掘調査一覧

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	調査原因	対応
郡山遺跡第318次	郡山遺跡南西部	14.0 ㎡	令和4年4月19～4月22日	個人住宅地帯	郡山遺跡ほか調査
郡山遺跡第319次	方四町Ⅱ期官衙中軒部	200.0 ㎡	令和4年5月16日～7月21日	遺跡確認	調査確認調査
郡山遺跡第320次	方四町Ⅱ期官衙東軒部	230.0 ㎡	令和4年6月23日～7月30日	共同住宅地帯	開発に伴う事前調査
郡山遺跡第321次	郡山遺跡南西部	16.1 ㎡	令和4年7月21～7月28日	個人住宅地帯	郡山遺跡ほか調査
郡山遺跡第322次	Ⅱ期官衙東辺大廣	16.8 ㎡	令和4年9月12～9月14日	個人住宅地帯	郡山遺跡ほか調査
郡山遺跡第323次	南方官衙東地区	9.4 ㎡	令和4年10月17～10月19日	個人住宅地帯	郡山遺跡ほか調査
郡山遺跡第324次	方四町Ⅱ期官衙北部	13.2 ㎡	令和4年10月27日～11月2日	個人住宅地帯	郡山遺跡ほか調査
郡山遺跡第325次	I期官衙西辺	7.0 ㎡	令和4年12月12～14日	深さ確認	開発に伴う事前調査
郡山遺跡第326次	方四町Ⅱ期官衙北部	12.0 ㎡	令和4年12月12～16日	個人住宅地帯	郡山遺跡ほか調査



第42図 郡山遺跡調査区位置図

第7章 総括

令和4年度に国庫補助対象事業で実施した調査件数は、令和4年12月末で29件（9遺跡）である。本書では令和2年度を含め、令和4年3月までに行った調査の中で、別に報告される郡山遺跡を除き9件（4遺跡）の調査について報告した。その成果については以下のようにまとめられる。

1. 南小泉遺跡（第93・94次調査）

第93次調査では竪穴遺構1基、土坑3基、ピット5基が検出された。土坑やピットの配置に規則性はない。遺構の時期はSK1土坑から年代不明の陶磁器が出土しているため最も新しい。また、竪穴遺構床面から出土した丸底の土師器壺を始めとして南小泉式の要素を持つものが主体であることから古墳時代中葉頃の遺構と考えられる。

第94次調査では性格不明遺構1基とピット7基が検出された。ピットはP2・5・6が約2.0mの間隔で直交する地点に配置されていることから、何らかの建物跡を構成する遺構の可能性がある。

性格不明遺構の堆積土からは十三塚式の特徴を有する壺や甕が出土したことから弥生時代中期後葉以降に機能していた遺構と推定される。

また、出土した劍形の石製模造品は近隣で行われた遠見塚古墳第3次調査でも出土している。こうした共通する祭祀関連の遺物が出土したことと、周辺に遠見塚古墳と関連する遺構群の存在が推測される。

2. 西台窯跡（第1次調査）

第1次調査地点は、遺跡の北側、沖積平野と丘陵の境目に位置している。今回の調査に先立ち現地踏査および地形の計測、遺物の採集を行ったところ、桶巻造りの平瓦や無断式の丸瓦が多数採集された。発掘調査の結果窯に関連する遺構は検出されなかつたものの、基本層中から同様の遺物が多数出土したことから、近隣の丘陵斜面に瓦を生産した窯が存在していたものと推測される。出土した平瓦はいずれも縄叩きの後に横方向のナデ消し調整が行われており、この特徴を持った瓦は7世紀末頃に成立した陸奥国府である郡山遺跡の、国府に付随する寺院である郡山廃寺で主体的に出土している。また郡山廃寺と同じ紋様の軒丸瓦もこの近辺で採集されていることから、郡山廃寺で使用された瓦は西台窯跡とその近辺で生産されていたものである。

3. 栗遺跡（第3次調査）

今回の調査では竪穴遺構1基、土坑1基、性格不明遺構1基が検出された。弥生土器や古墳時代後期中葉と考えられるやや古い時期の壺が少量出土しているが、出土遺物の大半は古墳時代後期の栗圓式II～IIIa期の特徴を有した土師器である。遺構内出土遺物もほとんどが栗圓式の範疇として捉えられる土師器であり、遺構は7世紀前葉から中葉にかけて機能していたと考えられる。

4. 北目城跡（第 11～15 次調査）

第 11～15 次調査地点は、遺跡の東部に位置する。今回の調査では堀跡 2 条、溝跡 4 条、ピット 5 基、土壌構築土などが検出された。北目城を構成する堀跡が 2 条検出されており、そのうちの一つは東西から南北に屈曲した堀跡で、第 11 次調査の SD5 と第 15 次調査の SD1 が第 10 次調査で検出された SD10 に接続する堀跡である。もう一つは南北に延びる堀跡で、第 12～14 次調査で検出された堀跡であり、第 10 次調査の SD1 堀跡から分岐した堀跡と推定される。第 12・13 次調査では、堀跡底部に障壁が確認されている。また、第 15 次調査では、堀跡に伴う土壌構築土が確認されており、城跡廃絶後に残存した基底部と推測される。

報告書抄録

ふりがな	せんだいへいやのいせきぐん							
書名	仙台平野の遺跡群 33							
副書名	令和4年度 個人住宅他国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第506集							
編著者名	及川謙作 早川太陽 須貝慎吾 吉田 大 柳澤 楓 妹尾一樹 澤目雄大 山口沙織 荒井 格							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-0011 仙台市青葉区上杉一丁目5-12 仙台市役所 上杉分庁舎10階 TEL: 022-214-8894							
発行年月日	2023年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	市町 遺跡 番号	北緯	東經	発掘期間	発掘面積 (m ²)	発掘原因
	種別	主な時代						
	要約							
南 小泉遺跡 (第93次)	宮城県仙台市若林区 遠見塚1丁目	04103 01021	38° 23' 92"	140° 90' 77"	20201214～ 20201221	10.0 m ²	記録保存 (個人住宅建築)	
	集落跡、屋敷跡	縄文～近世	掘立柱建物跡、ピット		土師器、須恵器、陶磁器			
堅穴造構1基、土坑3基、ピット5基が検出された。出土遺物の特徴から、堅穴造構は古墳時代後期前半に機能していたと考えられる。								
南 小泉遺跡 (第94次)	宮城県仙台市若林区 遠見塚1丁目	04103 01021	38° 23' 87"	140° 91' 44"	20201216～ 20201222	15.0 m ²	記録保存 (個人住宅建築)	
	集落跡、屋敷跡	縄文～近世	性格不明造構、ピット		土師器、石製品			
性格不明造構1基とピット7基が検出された。北東側隣接地で検出されていた河川跡は検出されなかった。								
西谷墓跡 (第1次)	宮城県仙台市太白区 西多賀三丁目	04104 01211	38° 22' 11"	140° 85' 47"	20210615～ 20210730	58.3 m ²	記録保存 (個人住宅建築)	
	窯跡	古代	溝跡、土坑、ピット		須恵器、瓦、石器			
溝跡1条、土坑1基、ピット2基が検出された。基本層中から、桶巻造りの平瓦や無断式の丸瓦が多数出土したことから、近隣の丘陵斜面に瓦を生産した窯が存在していたものと推測される。								
栗遺跡 (第3次)	宮城県仙台市太白区 西中田七丁目	04104 01038	38° 19' 20"	140° 87' 66"	20210224～ 20210303	24.0 m ²	記録保存 (個人住宅建築)	
	集落跡	弥生～平安	堅穴造構、土坑、 性格不明造構		弥生土器、石器、土師器、 須恵器、石製品			
堅穴建物跡1棟、土坑1基、性格不明造構1基が検出された。出土遺物から、古墳時代後期の遺構群と考えられる。								

北目城跡 (第 11 ~ 15 次)	宮城県仙台市太白区 東郡山二丁目	04104	01029	38° 22' 10"	140° 90' 01"	20211101 ~ 20211202	60.0 m ³	記録保存 (個人住宅建築)
	城館跡、集落跡、水 田跡	縄文～近世		溝・堀跡、ピット		土師器、須恵器、陶器、 鉄製品		

堀跡 2 条、溝跡 4 条、ピット 5 基、土壘構築土が検出された。堀跡底部では障壁も確認された。堀跡及び土壘構築土は、中近世の北目城を構成した遺構と考えられる。

仙台市文化財調査報告書第 506 集
仙台平野の遺跡群 33

令和 4 年度 個人住宅他
国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書

2023 年 3 月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区上杉 1 丁目 5-12
仙台市役所上杉分庁舎 10 階
文化財課 TEL 022 (214) 8894

印刷 株式会社 仙台紙工印刷

仙台市宮城野区苦竹三丁目 1-14
TEL 022 (231) 2245㈹
